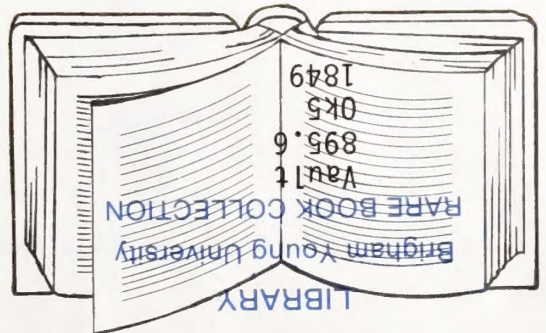
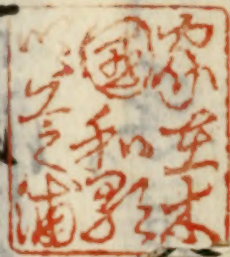
朝鮮物語
上
第貳拾貳號
全部
三冊

大河内秀元陣中日記

朝鮮物語　全

清風閣藏版

朝鮮物語序

余嘗論豊臣公之伐韓與秦政之築長城一也。皆以禍其子孫。而其功及有施於後世者矣。蓋秦政靡爛其民。以築長城遂致天下怨叛。子孫敗亡。然而豐

圭孽胡虜。制其奔軼者。莫
不賴長城為之隔閡焉。豈公
興無故之師。以斬伐異域。使
我士暴骸骨於外。我民困賦
役於内。遂至海内懷怨憤。雖
天命自有所歸乎。其子孫已

滅弗救者。伐韓之役。實為之禍也。然而至今三百有餘年。西洋諸戎雖或垂涎於我。不敢輕肆其饞噬者。豈非當日威武爗於四海者。有足懾伏其桀驁之心乎。書賈牧野善吾。將刻之

河内秀元朝鮮物語。來乞余言。斯書記豐公伐韓。和議既敗。再擧大軍事。自名源以下。采以修藩翰譜。則其爲實錄不可疑。夫伐韓之役。武家著者莫若碧蹄大捷。與蔚山死守。斯

篇所載。於蔚山事。爲特詳矣。蓋
秀元。在圍城中。親歷辛艱。當
日情状。皆以獲之於目擊之間。故
摸寫。得其實。使讀之者。至今
凛々有生氣。夫豐公伐韓。雖不
爲無功。於義則未爲得焉。獨至其

将士之忠勇義烈。百折不屈。以全其所守。則凡在人臣。尤當為師法者。讀斯書者。其領此意可也。

嘉永己酉夏閏四月弘菴陳人

大雅識

朝鮮物語 イ二記

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

抑大相國從一位前關白太政大臣豊臣秀吉公者總海無雙之名將也報先君之仇讎夷四海之逆臣舉有德賞有功又欲通異域冨邦境而遣使於朝鮮而後殿下發兵征伐之軍少有利故慶長丁酉發關西之兵又大征之予太田飛驒守之在幕下得逐馬塵故記所親見之事以貽子孫者也

朝鮮物語巻之上

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

慶長二年丁酉三月十八日公子筑前中納言秀詮公を以て朝鮮征伐の大将軍として高麗國釜山海の城主ニ任じ太田飛騨守熊谷内蔵允早川主馬首筧和泉守福原右馬助毛利民部大輔竹中伊豆守を以て諸軍の奉行として相従軍勢備前の浮田中納言安藝毛利中納言毛利宰相蜂須賀阿波守加藤左馬介生駒雅樂頭同嫡子讃岐守藤堂佐渡守長曽我部土佐守脇坂中務少輔帰島出雲守池田伊豫守小川左馬助菅三郎兵衛尉同弟右衛門八郎

島津兵庫頭加藤主計頭小西摂津守寺沢志摩守中川修理大夫立花左近将監鍋島信濃守小方甲斐守松浦肥前守柳川對馬守羽柴兵庫頭伊藤民部大輔毛利壹岐守同嫡子豊前守島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐（是等五人ハ壹岐守旗下の扱なり）志摩國主九鬼大隅守甲斐國主浅野左京大夫大小名四十二人其勢都合一十六萬三千餘騎

大相國秀吉公秀詮公次ヿ諸大将を召て上意ニ若年なれとも十六歳の秀詮名代の上将軍たり諸事秀詮の下知ニ従ふへし諸軍勢上下の働甲乙明らかに善悪誤らず有様ニ言上すべし其為七人の奉行霊社上巻の起請文差上べしとの旨

仰あり則殿中におゐて七人の者奉行起請文を認め御検使徳善院民部卿法印大理修理大夫をもつて上け奉りけり

高麗國の軍中御壁書の次第

一今度軍中諸勢上下の働明におせんさくを極め善悪を偽らず秀隹裏判をもつて七人の奉行言上可仕事

一十六万騎渡海の軍勢上下人馬夫丸等にいたるまで一倍の扶持あたへらるゝ事但馬一疋一日の飼料大豆六升米四升たるべき事

一奉行七人手前代官并の米入次第家中の人々右のこと〳〵く召連事

一秀隹前において萬事各相談致して多分の口上に付て善悪

の落居極むべき事

一　七人の奉行を頼んじたて戌つくもの有るに於てハ言上有及ずして秀吉急度てら申付事

一　術武略を弁へ次見合もしらずして越度の働仕るまじき事

一　秀吉の鞭影を以て言る朝鮮國の八ヶ道を先として大明國の四百餘州南蠻吉利支丹國其外遠島に至るまで武命を限り不切取置し異國軍兵の頸塚を日本にのほせ可申事且また和漢後記の為なり然ハ則戦場の高名ハ言ふに及ずして老若男女僧俗に限らず賤山がつに至るまで悉く薙切て首數を日本へ渡すべきもの也

右之條々於帷幄を軽重に依て急度可被仰付もの也

右の御壁書の御朱印十九の御陣中に掛られ候

五月廿一日辛亥辰の刻筑紫の太守黄門秀詮公御出陣御門出の御目見として御登城四十餘人の大小名御供仕るなり又秀吉公御機嫌能く別て御付御小袖三百御帷子五百御草物三百金銀長光の御太刀波およぎ備前兼光の御腰物御馬五疋秀詮卿へ拝領は大将より悉く御小袖は帷子なる彩て金銀を鏤し秀詮公御座船に御召下まて後橋より御先陣に進ませ給ふ名大小名は豊後橋京橋より船に乗思々の馬驗舟の表に押立母衣旗指物弓鎗鉄炮をならべて舟に飾り家々の紋ある幕張まはし一

手ごとに押出す船の刺諸人の妻子今を限の別と思ひける
おや貴も賤も舟の汀に送り出て男の舟に取添て鎧の袖
草摺に取付て同じ道にと泣叫ぶ次第々の出船成ば猶教訓
し船中より声を下し舟を急で押出ば暫く舟をとゞめ見送りて行を
限りある露の身をと泣々別の物思ひに沈みける事ぞ聞しこそあれ
と云も何へぞ宇治川に飛入て沈むもありし昔へ聞古の松浦佐
夜姫と云らん唐國船の名残を慕ひ遠方波に袖を濡し次第
すゞきに沈みしとやらんも是にまさる事ては増るべきと上古も
今も末代も例しなき門出送り見送り泪は數添ける折しも
頃は五月の空吹風はさぞ寒て秀吉公御船は摂州大坂に着

廿日ハ諸勢淀山崎にゆへ後陣ハいまだ伏見を出やらず三百六十余丁川水の上錦を晒せ如くつゞく旌旗日を蓋ひけり廿二日大将軍ハ公をはじめ奉り諸大将大坂を出船し兵庫の湊に纜を解 其道十里余 廿三日兵庫を乗出し播州室の津に着岸す 其海上十八里 廿四日備後の鞆の湊に陣す 其道二十里 廿五日周防上の関に着 此海路二十里 廿六日秀詮公長門の下の関に御着陣 其海路三十五里 廿七日御領國の筑前へ御入城有て朝鮮へ御渡海の御用意あり諸大将も国元城地へ入にけり七人の御奉行廿六日にイロリト二十里と乗渡し壱岐嵯峨の関に着岸し廿七日の未明に太田飛騨守一吉嵯峨の関を出船して回杵の居城に着船す 其道七里余 廿八九日より塩味噌酒肴大豆扶持方

数百艘に積浮べ先立て彼国へぞ出けるに飛騨守が祇園丸権現
丸と云十六反帆弐艘の本舟に石火矢大筒中筒弓鑓玉薬其外万
蝋燭次下に至るまで悉く積せ切籠の燈籠突鐘をうたせけり家
中軍士面々の乗船に中筒弓薬船幕船印数々の旌旗櫓を梶
増梶に至る迄残らず舟ごしらへける六月廿五日七頭の御奉行在所々を
乗出し嵯峨の関に集て豊後の内竹田津の湊にのぞみ嵯峨の関
より（此海上十五里）廿六日卅田津を出て長門下の関に着岸し（此道十里）暫く爰に
汐がゝりして各日の引返に潮を関の戸に乗取ほどと飛騨守が
大船弐艘の切籠に火をうつて軍勢に先立て日本第一の迫門に
続かく家々の丸印に迫門口より海上に化粧出来てける飛騨守が

本船に少も違ざる大船二艘出て隠岐國に差當て押行ける續く兵船是を本船と心得て妻子の乗行船もゆて本船に後きてら手に乗来るもありける飛彈守是を見て下知をなし本船を乗ゆらく切燈の火をけし頻に早鐘をせめ急ぎ軍約の貝をたて同せられば彼化物と連行兵船の外仰天し水主梶取梶を廻し本船に押續ぎさみけり夜中筑前地の嶋にぞ着にける下の関より十里此道翌廿七日肥前名護屋に至岸より此舟路三十里廿八日名護屋に帰陣して諸将の宿所へ大小名惣着到を付られけるにおのおの惣軍勢集りぬ廿九日秀詮公御召船日本丸を見奉れば遥に沖に浮べさせ給ひけるが壱岐國へ渡海と御下知の鐘を突せられ各兵

船急ぎ押渡きなり壱州風本湊へ乗入る 此乃十八里 七月朔日順
風を待て風本の湊に艤次二日数万艘の兵船悉く乗出し沖
中に至ると云へとも逆嵐暴くして船舟を覆さんとす故に諸将又
舟を風本に戻次四日の夜に入て亥の刻計りに南嵐烈く吹来
て諸将風本を出船し五日戌の刻計りに対馬国鴨瀬の岸に着
船す 此海路四十八里 六日対馬国 三十五里 の灘を渡し申の刻ばかりに対州豊崎
浦に着岸す然る処に数万人の船共明日の日和を見切て只今
船を出すべしと云ければ我劣じと惣軍戌の刻ばかりに乗出す今
ぞ日和の別きありと風は水手を任せ漫々たる舟路の旅泊遙左
右に山もなく渺々として滄海雲を浸し東西南北を弁へがたく船

人共云けるに朔晦戊の刻より順風頻りに吹て帆風に満帆かけれバ漸高麗國の地も近くなれるぞと山も見へさるなんど云し中に舟の表に當て黒く見ゆれバ雲か山かと疑ふ者猶に數人遠見し何もあらず釜山海城の兄哉にありし山也と勇けれバ船中の上下古郷に艫綱をとれる思をなそへなりけるに釜山海より二里沖なる椎木島の岸にいで朝鮮の大軍船數百艘乗浮べ釜山海の湊口をふさぎ空より石火矢大筒を打鳴し島ハ烟に覆たる日本數萬の兵船海上三里計より順見し帆を卸せバ波上にゆし〳〵甲冑を帯し弓弦を鳴し筒に薬を込鎗長刀を手〴〵持て船軍に取結ぶべき旨各承存の處に案のごとく秀詮公の日本丸太田飛驒守が祇園丸の大船より相図の早鐘責られバ味方

の兵船諸将の下知に随て順風に梶をとり直し帆を揚口に引のけ進まし猶豫は敵の大船を乗散し事抜かく釜山浦へ乗入る事も遅るゝ鵜島信濃守が舟二艘敵の番船に取こまれ対州豊崎より高麗國、釜山浦まで海路四十八里ばかり

大将軍秀詮公、釜山浦に御入城あり惣軍勢は城より西の渚に乗上り一手〳〵に備を立已に七日の夜に入て芝居に篝を焼明し八日に野陣をとりのけ久々船中に立すくみ弱りたる馬を陸に下し身をとゝのへ湯場に湯洗ひし足をのべし軍士の息を休む十四日全羅道の内竹島と云所へ渡る　其海上十里　竹島より十七八町海路を隔て唐島と云湊あり南北へ一里半東西へ三十五里あり此唐島と高麗の地其間一里半

路の海上するに十五日の早天高麗の兵船尺寸の隙もなく所せき
て押並べ石火矢大筒打ける音山海に響きたり敵番船の為體頗日
本船に比ふ庵きをなし舟の長サ五六十間ありて三尺四面四尺四
方の角材木を以て大貫作りに釘多しに作りへて継口の合せ目に
内外よりチヤンといふ油を流し塗れば只焼物のごとくなり二階
三階に船の板を敷渡し櫓の長サ八九間ある大櫓に水主八人ヅヽ向
て押桁を入人の望の櫓数をもて自由自在に押廻し左右前後
大石小石火矢棒火矢数を尽して掛並べたり其大弓の長サ四間ばかり三尺
廻りの材木をもて作りスヂといふものを弓弦よりより合せ弦に
かけたり其矢の長ケ二間余りの木を八寸廻りに削て四尺計の鏃

の三門羽を付二尺計ニ鏃の石突をさげて機をもて二階三階乃舟矢倉より五丁が外へ射放つる其外半弓ラシン弓の射手鏃炮烙火の役者一艘の其中に甲の備をしめ兵仗をとやきはさんざる精兵二千三千人ずつ乗幾千艘と云数をしらして唐島迫門の海上ハ金鼓雷を欺て天地も崩る計りに同ずる時の都りをぞあげける日本の諸将竹嶋の向ひ海上皆三十五六町を隔て安骨浦高麗と云湊に乗渡り蜂須賀阿波守が本船に各集りて評議を阿波守がいふハ抑あの山乃ごとくなる敵数萬艘の大敵日本ハ僅の小船小勢にて乗合せ戦ん事成難し所詮此度の舟軍ハ指置て陸地に付國中を攻侵し然るべしとありしに太田飛騨守

云たるまで眼前の敵を差置て目にても見えぬ陸地の敵を討ん
とハ事理が分別にハ心得がたし各如何と有ければ加藤左馬
介進出て云けるハ仰のごとく此大船其まゝ捨置に於てハ釜山浦表
権の木島に乗出し日本より渡海の兵粮船を取留しなれバ
味方の軍士上下飢に労を極し不肖の某末座の推参に先
年文禄元年の御征伐に御奉行石田治部少輔ハ分別の了案
を背き主計頭清正が我意に任せ捨身の働忽勝利を得る
と云共是ハ奉行の威に依て石田偏りの言上實儀なりとて清正が
忠節ハ空く剰え君の勘気を蒙りぬ此度七頭の船下
知を背き越度の儀を仕に於ハ曲事にてと仰付らの上と御

直に乗り移る事如何様共に差引次第たるべしと云ければ諸将悉
然として物言者一人もなかりけれバ左馬介嘉明飛彈守より
向て某少し乗出して敵船の様子巡見致し候んやと伺ひ
ハ飛彈守諸大名敵の大船に辟易し進まざるを見及て左馬
介に目くばせし先なりちぢと乗出して巡見せられよと答ける左馬
介ハ奉行の下知をも受ずして我舟に乗移り静に碇を引上推
出す毛利壱岐守言けるハ又いや左馬介卒尓の働せんとするにや
各相談も未極らざるに味方崩しの抜駈を一興と云ければ左
馬介からくと打笑いふに一列あまた祖山のごとくなる大船に某が五
枚帆の小船にていかで卒尓の成べきやハ奉行たる田殿の下知として

て巡見に出るなりと云捨て二町余り乗出しける飛騨守我か宗
船の小鷹丸に乗後れけると見て島津又七郎我舟に飛乗急ぎ漕
ちとはやと本にありく乗出し旗頭の者とも是を見て又七郎麾
あり乗止るべしと大音声に下知せられども共跡を振向て気色も
なく三町許の内外にてはや典厩か舟に並びつゝ柱に押
付られけるに典厩急の櫓の棟に飛上り鳥毛の輪ぬけの采を指挙
味方続けと下知しければ飛騨守舟の矢倉に駈上りて五人に余
旗の棒七幅に白きのまれん付たるに馬験を振上て左馬介又七郎
討すなと呼ければ兵船と大音の下知に随て安骨浦の湊へ寄せ来りしと
乗後れたる味方の兵船碇綱を打切て我劣らじと乗出し敵

の大船に悉く乗付たり然りといへども味方の舟より敵船のさき
にすゝみて二間柄の槍さし末端ばかりぞ乗入けるハ覚悟に及ばず敵方
よりハ日本の船ハ敵の大船の櫓の下へ乗付さるに依てすべき様なく
かゝる味方の諸軍士稲く武略をめぐらしといへども更に及びがたく
見へざりけるに軍兵共に筒をそろへて敵船を打ちて水夫に櫓索を
とらせず火矢を射込焙烙火を投をとして打込けれバ敵の番
船の中に影しく投入ける火薬に火移りて雷よりも怖
しく響渡りて焼る三重三重にしき渡る其の櫓軍兵共に
海中へ刎落ば照りに照る日和にての外に焼けれバ舟底に
居たる軍兵水夫に至るまで船中にたまり得ず前後左右の海

中に飛入死する午の刻の始より未の刻の終まで二時斗せめ舟
軍に焼破棄られる朝鮮の番船一百七十四艘なり軍士も少々討
取ぬ數万の大敵に山のごとく成たりしハ孟賁夏育が力を得
尹錮周瑜が謀を廻しとも討勝難き所に大君殿下の御聖運泰山よ
りも重く金鐵よりも堅きが故に不思の外に勝利を得殘卒の運命
も餘りにける残る數船ハ四方八面に退散せし後に藤堂佐渡守高
虎が甥藤堂仁右衛門尉佐渡守が先陣に在しが傍輩の後島与
左衛門尉に向て云けるハ諸手残らず舟をとられる名せし所に言
虎舟一艘も取得ずして手を虚にするま恥を世の念ぞさも何の面
目有て後日に人に目見べきぞよ某に於てハ快く討死し生前の恥

きとぞいかんと云ければ藤島堅く制して曰く嗚呼の高名ハせぬ
ものなれば其上今度の船合戦今に限る事ならずと云けれども
仁右衛門尉鳥獲を欺く勇士なれバ無理に追かけて進ける程に
敵船三艘引きかへりて退けるが陸に押あがりけるを仁右衛門尉
推かけ其舟一艘引付てぞ斬りける五里六里の海上に流れ浮
る兵仗ハ鱗よりも多かりけり血ハ潮を染なして忽ち紅の波
を流し骸ハ波上に漂ひ浮き沈みけれバ呉魏赤壁の古へ宋
元黄河の争をも今に見るかと思ひ遣る十六日諸将竹島の城に集
てそれの奉行軍功を僉議して抑昨日の舟合戦ハ乗出までをハ
遅かりしかども敵船へ早く乗付つるハ島津又七郎なりと

て一番と定めらる乗出せハ早かりけれども舟遅くして敵船に廿し遅く繋付けるとて加藤左馬介二番と成秋月三郎高橋九郎三番毛利壱岐守吉成を四番と定め大小名家中こゝの兵共を實検し首数七百十二軍中總督の為體委細註文に書記し七日早天使番の早船をもつて日本に言上す諸将竹島に滞陣し手負人を看病し舟軍に疲れし兵具を用意し舟の櫓櫂をぞ調ける朝鮮國中働く人数を定む船手に働く軍船は奉行熊谷内藏允早川主馬首并毛利宰相九鬼大隅守寺沢志摩守長曾我部土佐守池田伊豫守小川左馬助中川修理大夫伊藤民部大輔立花左近大夫脇坂中務少輔來島出雲守菅三郎兵衛尉同右衛門八郎毛利中納言輝元が名代宍戸備前守安國寺陸

路ハ三手ニ別て働く北表ニ働く軍勢ハ御奉行太田飛騨守加藤主計頭両人北ニ向て働く定なり陸中筋の軍勢ハ奉行竹中伊豆守并加藤左馬介蜂須賀阿波守生駒雅楽頭毛利壱岐守同豊前守島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐一手ニ成て東ニ向て働く極なり陸手南筋ハ奉行毛利民部大輔并浮田中納言小西摂津守長曾佐渡守羽柴兵庫頭各一手ニ成て東ニ向て働くべき旨秀詮公被仰付らる廿八日右の諸将卅島を出船し唐島の迫門を押渡アヤレ川と云川面十八九町の大河を上りニ七日押上る八月四日忠清道ウレンと云所ニ着陣す 其道六十里 陸船手の惣軍ウレンニおゐて野陣を取て五日逗留し船中ニてくるしめる馬の足を休め陸陣の用意しけるハ山谷

不乱の男女僧俗餘多捕来る其中に人物勝れてみゆるシヤグジン
あり國中の案内を通辞をもつて具に尋けれバ者冠谷て是より道中
十八里を隔て忠清道南原の城堅固なる龍城に城主ハ南原判官とて
二万三百余騎の大将なりか勢として慶州判官二万余騎の大将摘
なりとぞ聞えける陸手舟手の諸将寄集て評議ありしに南原高官龍城
万余騎なりとぞ雑兵十万に余るべし然バ陸手の備へ斗りにて敵国と云
事危き事なり同じく舟手も指揮して押寄べしとひしめきけるを飛騨
守伊豆守申けるハ舟手の軍兵各陸より押寄なバ其後の兵船ハ浦々に
繋ぎ置バ必定高麗の番船乗出して悉く舟を焼破るべし若左も
有に於てハ日本の軍役如何勤べきや其上各馬を乗来とも見へ

ばかりに上下弓杖ばかりなり十八里の道中出立の仕合まことしく次
縦令百萬騎稍籍といふとも秀吉公の御勇武天が下に勝させ給
給へば公の御威光をもつて神明佛陀の冥感にかなひ奉り忽ちに責破て
両判官を討とらんと勇進で云ければ諸将一同に潔能も云へり然るに角
に此度の先陣引受次第とぞ答ける然して伊豆守隆重内蔵允主馬
首ふ向て云けるハ南原落城一左右の間に舟手の軍勢各らレンに在陣
せらるべし彼地善悪の言上せしむる押手の軍兵を釜山浦まで寄
ぐ遣事成難し舟手の内若き馬立越まで下ふ者あらば二三人南原
の様子見て同道すべしと云り脇坂中務少輔伊藤民部大輔来島
出雲守二人進出て我ゝ馬をも持得ものも供申さんと云極ける家

菅三郎兵衛村田右衛門八郎兄弟も一峯行に請てぞ南原に赴ける八月
十日諸軍ハレンを立て押前の行儀正しく貝鐘の相図法度を守合堅
約して昼夜の境もなく十八里の其道を揉にもんで急ぎける久しく
舟に立さらみ小陸地勢の馬岩巌石の難所の山坂を云に一息も
此度乗損に或は乗殺し乗倒し死ける馬其数をしらずして翌十一日の
寅の刻ばかりに南原の城近く責寄ければ共比の外霧深くた
の遠近行路に依て生捕に尋て城よりも三十余丁が外の坂の麓に
旗を立霧の晴る人を待所に未の刻ばかりに四方明に成には城十四
五町が間に兵をとゞめし明十二日の曙の霧を味方に城際へ旗をよせ東
西南北をとり囲む惣軍の表に八柵逆茂木を付廻し昼の間馬がけ夜

討の用心かぎ番外聞の張番ハ云ふ及ばず舟を夜中焼明しける
加藤左馬介ハ清正の大將として城中より其間十六七町隔て丹
し山ふ備を立て前後左右ふ大柵二重付巴し口を千鳥ふ付廻し周
ふ厳敷陣取り

南原の城取寄の図

脇坂中務少輔

小西攝津守

竹中伊豆守

門

蜂須賀阿波守

加藤左馬介

南　大田飛驒守　門

浮田中納言

本丸

方十五町　門

羽柴兵庫頭
福島出雲守　北
菅三郎兵衛尉
同右衛門八郎

蜂須賀阿波守
毛利民部大輔
生駒雅楽頭
同　讃岐守
毛利壱岐守
同　豊前守
島津又七郎
秋月三郎
高橋九郎
相良左兵衛佐
伊藤民部大輔
東

柳弍城の為総二十五町四方有て大石をもつて高サ十二間　中の石垣のり

堂に築て石合に漆喰を詰込てあれバ焼物のごとくあり上に塀を掛廻し方々隅々二重三重の櫓をあげ四方ニ高サ六七間の門の大門をたて大廂の桟木をとろて格子の扉を飾り堀口五十間の外に堀の中に堀あり又塀としての付回し塀内外のうら堀に壕の高さびしきを明るかくまなくちらし塀裏の櫓に石火矢大弓大小の鉄砲をならべ仕かけ四方八面へ打出し手足の小筒を打矢を射出し車雨霰の降がごとく東西来仕寄の用意も見て次第ましども南表の二段に十二日の夜より竹たばを付初てから仕寄たる堀の填草登り様で悉く用をとして十三日十四日十五日に至て仕寄をとし既に堀際まで付寄ぬ去共丈夫成城郭ニ数万騎の剛兵楯籠守れバ輙く攻入事中々成

雑く見えける所に佐渡守が軍士藤堂作兵衛尉總成組にて夥く火矢を放ちけるがたとひ焼草を持かけ火を付たる共焼付ざるによつてあやしふに彼火矢にて本丸の角櫓を焼立てけり飛騨守が軍士是を見て火矢にて焼立ると云つゝ思ひもよらずらぬふまつて大河内茂右衛門尉田中小左衛門尉に向ひ云けるは藤堂殿ハ乗入玉ふと見えて櫓を焼立けるぞやと云ければ田中聞てつゞいて入べきなりと云侭に外の堀へあやまたず飛入ける大河内九郎兵衛清水弥一郎豊島金左衛門弾塚源四郎押続ひて飛入堀の中なる塀を乗越石垣に付たる所に弾塚登桟を持居たるが我組頭たりし貴志六右衛門を呼で待居たり大

河内其様子を見て石垣へ打掛登らんとせしに弾塚大河内を押のけ先へ登りける次に大河内上り其次に清水乗上り様八郎踏折られ其より四五間西に様をとりつけ豊嶋九津見等なるが跡より大勢我劣らじと押合揉合ける程に竹の様ハ折られける大河内大音揚て其旗早く入よやと云けれバ九津見元来旗もちなれバ尤と云て和もなく旗を翳し塀ハ高し入りかねて見へけるが者共人の肩に乗て指上ける八月十五日の夜亥の刻ばかりの事なれバ只五人先登にし大音聲を挙て南原の城一番乗飛弾守と名乗面々我名を名乗て関の声をぞ揚たりける飛騨守が二幅紺地に白く丸の内に大文字染付たる旗五本城

中の焼る矢倉の陰へ立廻へ西の夜風に飜し諸軍の鏡と顕しけり
城中俄の鬨の聲に驚き塀裏の軍兵悉く裏崩して戦危き敵
かく思の外に要害破り門を開きければ飛弾守元来武勇無双の大
将なれバ軍兵など立纏ひ南大手の大門をも舊地に乗入ける貴志六
左衛門一番首の高名をも三の丸に下地して早八方を焼討し然に佐渡守
が先手藤堂仁左衛門尉同新七郎同鬼兵衛尉藤島與左衛門尉白地に日
の丸五ッ置たる一流の長旗を先に立をバく乗入る脇坂中務少輔
が借地二幅の折かけに白き輪違の付たる五本の旗浮田秀家が先手
浮田左京亮戸川肥後守引続て乗入り徒る間城内に餘烟十方に
散乱せしかば籠兵途を失ひ北を指て逃るもあり或ハ西表の小

西摂津守が段々と散々切捨てぞ退きける残る精兵方々へ馳散て入乱れ揉合せ火を出してぞ戦ける爰に大河内も向敵二人討取て今日ハ八月十五日ハ氏神大菩薩の御会日に当れりと屹度思ひ出して刀を打捨紅に染る掌を合て遠く日本をぞ拝しける扨鼻をとり具足の鼻紙入に差入てとある士町に駈出て見れバ敵五十騎計真黒に備へたり大河内ハかへりを見れバ傍輩ハ一人も見へねバ浮田が軍士十三人立より大河内彼に向てあの敵に駈向ハんと云けれバ浮田が軍士答てあの五十騎計の軍兵に歩立の士二人三人駈合て何の用にか立候べき先是に扣て味方を待掛り給へと制しけれバ手の者にひぢわれて立居たる所に彼五十騎計の敵乗通る大河内二尺八寸の刀を以て馬上の敵

の右の股を切て落せバ只一討にて股ハたまらず落けれバ敵ハ左へ落さ
まふしをあをりに立たる士共ハ其首を奪ひ得ぬ馬上の敵を待かけて
三人切て落し四人に當る敵を切たれバ股の皮まで討掛て左へ落
けるを大河内其首を奪れまじと走り寄て是を續て乗退敵の首
に當られ跳ひたる其間に又首を取て奪れたり斬りける所に侍
筆長田五郎兵衛尉打擲まし在たれバ大河内田中小左衛門尉に向ひこれ
にて長田高名をと仕後れたりと見てやり力を添んといひけれバ
田中充に馳廻る折しも騎馬の敵二人出來り乗退給せと田中鎗
提て弦をと突きしかバ敵ハまよひて田中が鎗をひつ挾のみ十四
五間計引ずり倒して馬を早めて退けり其人の敵にて大河内

頸をひけるに敵馬よりさんざんに乗て後様に鎗を抜て切拂ひ掛通らんとせし敵の鎗先大河内が手の甲に當り少し切て刀にてよく切あて一鞭打て乗行る敵ハ馬味方にて歩立になりけれバ力なく討かねしぬ大河内長田に向て此上ハ力なし手を明ても如何なるべき其かり高名を後證に一ツ遣せとて長田に二ツの内を與たる長田大に悦て有難き心入とぞ戴たる扨其より此彼に働て倭勢小西行八郎近藤甚右衛門尉深井忠右衛門尉に出合ければ大河内四人一の丸に駈入るに深間五六間に棟行十四五間なるちんにて戻りたるに家あり大河内乾の見るに堂中に人もなし縁の高さ六尺計有て四方壁に塗立てり其上を蹴けるし見まバ長七尺計の大男真黒

于鑓ある朝鮮人三て人鍛りの大太刀を抜放ち切て出ぬ深井十文字
を取て戌し突劔をかへしてきくん朝鮮人鎧の袖ふ引まとひ革
の目打をひ引切て中りり抜打捨ぬ二番ふ近藤二人計の中身鎗
をとりて突ぬ奉へバ是も袖ふ引てみ中ぬまち汁抜け大太刀打
振て切掛りし戌見まバ只仁王の飛き出きるかごとく如何なる天魔鬼
神なりとも欺く程の勢なりしかバ四人ともに切立られ一足も何きもみし
押付を見せられ我去十日ふ夜の明るきく澄渡り四方橋家居ねく
の光み日堂のごとくゆきやう成ふ敢て大河内さて逐も不きと彼大男
抜かけある大太刀を以て大河内が椎形の甲のまなとをうけ彼濃
六寸計切破二の太刀ふて射向の袖の端より手先の籠手まで筋

遠見切付て又妻が手の小手を續けて二刀切付ける味方ハ此ぞハ切ま
くめ〳〵大河内爲方を失ひしろ飛入て敵の面へ刀を切付られ
少しひるむ所を飛掛り突倒し上に乗かゝり胸板へ刀を突立二ツ三ツ
貫くと息きれ居る所を小池新八郎帰り来て敵の胸板に
突立たる大河内が刀のつかを握りて三刀切て鋒を付まゝ子大河
内が右手の大指を二ツに切破大河内敵の刀をとりて立上り誰に
ても手をとらぬる人あらバ急ぎ此首をとれと遂へ奪首をとり掛て
味方打せる臆病者飛騨ちるに披露して切腹させんと急たまひ流
井志左衛門尉来て大河内腹立かる所極せりひとまとて甚怒し給ぞ
し某を初て悉く退ぞるをと取て返し合苦辛の手柄をも思ひ

維ゟ此者に手掛るもの有んや六助あの鼻捻て大河内が若党を
持せよと云ける篠崎六助といふ足軽畏て脇差を抜鼻をおく
んとせし大河内彼死骸を見まして錦の鎧なり錦といへバ事
朝鮮にて平人に非ざる事と聞しかバ如何にも六助其軍士の出立
自餘の軍兵に替りけり其首に小池が取と深井が取共に書付
て致べしと云ければ深井尤なりとも頓て冑と共に頸を剣て大河
内が若党椋本三蔵に持せてける大河内其具足肩にかけまゐらんと
しと云ければ三蔵引立んとしけれど共中々重く持得ざれバ
切つまて半分持せたり然る処に蜂須賀阿波守勝豊が軍兵譚介よ
里刀を打来て大河内が討れの刀をとまりなく清月日ハ早く返弁

城しろかゞ大河内が道具持ニ今若と云者ニ云付縄の端ニ石を
付てあれおろして乗口の石垣をはからせて本陣に帰りける處深
七本陣の白砂に篝火を焼せて左しが不斜なしきわさ四人の
者に詞をと掛如何にやと乗口石垣の高下ハ覚きるや各〻ハ貫
ざるやと云ければ深井申けるハ乗口の石垣只今大河内はかせければ
三間半は又二の丸に飛て大河内強力者に渡し合せ手の甲四ヶ所
切られしかども手負ず矢手二ヶ所皆深手に射込まれけれ共異儀な
く敵ハ討留にと披露せし大河内紺地の錦の鎧をも持出し
實検に入ければ飛騨守大に悦き首を明日持出べし其者
あぐるに抜群の犬が盛りのありと感じられ候

十六日太田飛驒守小屋へ竹中伊豆守来て諸手の人數高名實
否有大河内が高名爽かに流は論に包来明より詮義出て小屋
の入口に居ければ飛驒守其方が高名より注文に記しおけり
大河内申けるハ夜前中より如く鎧諸人に替りては異國本朝を
らぞて錦の鎧直垂ハ平人に非ずと申傳へは若大將にてもいて傳
備の爲に然るべくいへば生捕の軍兵に渡し首ては如何とさう
て某が身の爲に申上るに非ずと云ければ飛驒守伊豆守と問
ひして大河内が高名をとるべきものに載て本陣の白洲に居
置て生捕共を召出し此首の名を知らば書付べきよし通事を
以て云聞ば生捕共は是を見て悲しける氣色も有涙を流せ

者もありしが筆を染て慶州判官馬上二万騎の大将なりと
て下手なり飛騨も大に眩て味方十六万騎ながら一番笑の
上下剝大将を討と云事和漢の誉何事か是に如ん二人の
手柄なりなどゝ言上ありし日録に書記されば又大河
内筆者の筆をと押へて伊豆も攻の中上へ此首を飛騨も家中
の生捕計にて有よし言上有て後日若法大将を縁らの
ひとりて疑ハしくも法事ば後悔もはべきに諸家の生捕を以て
法をばさらし法大将を悉く露見の上目録にば記有べきや否と
云伊豆も深く感じて最前の一言さへ無類と思ひしに唯今の
法ま猶重く尤至極せり法ゟ追末若年にて飛州の小分に大

忠たり太田殿は目を掛らるまじくと殊の外にぞ誉られける扨両御奉行より諸大将へ生捕共を召連早々来り候へと触に随て諸将飛騨守が本陣へ集る諸手の生捕共一人も残らず右の如くに書記しければ則目録に書付けり諸将羨みて太田殿は二人前の大まざると感じける飛騨守伊豆守南原判官は如何にと生捕共に問ば南の門より切抜出んとや其の塀を越んと落んとする夫分諸将も皆本陣へ帰りしに藤堂佐渡守遅く来て座しけると飛騨守大河内に指差して如何に佐州あの者子が家中に於て一番乗して然も大将を討とりしと云ければ佐渡守大河内に向て御身の家の若年にあるが重々の手柄なり御身を先乗あらば能存知しるべし飛騨守

乗前より某が乗前を抜群早かりしと云大河内聞て夫は我覚遠
ざかし我等五人城中に乗入て一番乗して勝鬨を揚て手前
の軍兵堀の内塀の外にて鬨を合せば攻て左右の勢續けしと呼り
かゝる所に某にて御軍勢未だ乗入ざる前に飛弾守は三の丸に乗入十方
に火をかけ焼討致せば其後諸手より乗込たりし此事に於ては
佐渡守へ対ふ立服し汝一萬乗と云ふは偽りたるか何の所を知て
と高聲に怨怒して大河内聞ていよ佐渡守我等が伴と云ひ東者を
いひ高居ふらせき田舎もの高下の詞ハいかゞなる其方が海言葉かん
将に夫甲冑を帯しめく戦場に臨ては下馬するは武士の法をしらざるや其
方が前のきの荒言ふ驚きは事かしくも高く云ゑは九津

見清れ豊島弾塚ホ来さくめ何ホ佐州備人眼前ホ顕し事我能ハ
あらぬ物しと思ふこそれバ佐渡ゟ外ホ逃るゝ詞もなく刀をぬて出死
しけるが藤嶋兵左衛門尉を使者として佐渡ゟ方より飛騨守方へ云
誠なるや唯今ハ若き人ゝホ卒尓の事を申らけ面目を失ひ陣前ホ而
呈穿鑿いたしけれバ彼人の詞ホ少も違ハ何とぞ五人の口上を仰和げ
られ候ハ某が兼而も貴老同前の言上ホ於てハ一世の面目忘るべし
又伊豆守殿民部大輔殿頼入りとの趣を藤堂直談ホ申上る飛騨守
五人を召て藤堂方より是くとあるめ何と云り五人取り遠く日本の地
を離れ角名城を先乗仕難く攻落し名誉を顕ハ然早くも
き藤堂殿をとこし同前との事　縦令頸を八度刎られ候共此元と申し

上難く候其上公の御前にて偽の言上有る間敷由にて誓紙を上てもなれ
と承り候へ公儀を掠る事を露難るべくと一同にぞ申ければ
踈る藤島に向て吏と五人の者共口上を具に佐州へ語るべしと云り
伊豆守民部大輔が云けるは何に藤島佐州は有様に二番衆の言上
に記すべしと云へしが有しかば藤島畏て偽る既に目録相極りしに飛
騨守が右筆兼庭宗右衛門尉長田五兵衛尉左右に畏て日記を記しけ
るが長田筆を止て某昨夜討後ち中に紛れ大河内高名の内と云某
に與へ候と申上る飛騨守伊豆守民部大輔大に感じ大河内能き事を記
せらり又長田首帳に云けるは其時討れしよりは手柄なり大河内
が高名を三ツ長田が高名八ツと記すべきとて頓て死人の首一ツ

なへて日記にハ不足ハなりけり
十六日太田飛騨守竹中伊豆守毛利民部大輔諸軍の首日記を実検し
軍中の手柄委細に注文に記しける
イ二作同十六日上高麗南原城慶長二年丁酉八月十五日亥刻落城
一番　太田飛騨守　家中先乗
首二討取　越前國住人　九津見兵藏
同三 内ノ大将 慶州判官　三河國住人　大河内茂左衛門尉
同一 イ二作同二 同一 伊勢國住人 豊島金右衛門　近江國住人　清水弥一郎
同一 南原一番乗　伊勢國住人 イ二紀伊　彈塚源四郎
同一　紀伊國住人　貴志六太夫
同百十九　飛騨守手

二番　藤堂佐渡守　家中先駈

首三　近江國住人　藤堂仁右衛門尉

同三　同　藤堂新七郎

同三　美濃國住人　藤島與左衛門

同二　近江國住人　藤堂作兵衛尉

同二百六十　佐渡守手

首数六百二十二　備前中納言手

以上南表三頭合首數千一

首數六十四　竹中伊豆守

首數八百七十九　小西攝津守

同　九十一　脇坂中務大輔

以上西表三頭合首數千三十四

首數五十一　加藤左馬介

同　四百二十一　羽柴兵庫頭

同　四百六十一　帰島出雲守

同　十八　菅三郎兵衛尉
同右衛門八郎

以上北表五頭首數合九百五十一

首數四十　毛利民部大輔

同　四百六十八　蜂須賀阿波守

同　十一　生駒雅樂頭
同　八　生駒讃岐守
同　五十　毛利壹岐守
同　三十　毛利豊前守
同　三十五　相良左兵衛佐
同　十七　島津又七郎
同　三十五　秋月三郎
同　二十五　高橋九郎
同　二十一　伊藤民部大輔
以上東表十一頭首數合七百四十

右總首數都合三千七百二十六　奉行在判
判官ハ大将なるゆへ首をも其まゝ其外ハ悉鼻を切して塩石灰をもつて
壺に詰入南原五十余丁の繪圖をも記し注文目録に相添て日本
へ進上すとてウレンに在せし奉行内藏允右馬介主馬首三人へ書状
認め伊豆守民部大輔飛彈守南原の陣所よりと書上て伊藤民
部大輔帰島出雲守脇坂中務少輔に渡し伊豆守脇坂に向て
云けるハ言上の寫し大将軍公へ奉る急御遣し釜山海へ持参有て杉
原下野守山口玄蕃允をもつて指上られし落城の仕合ハ口上にて言
上有べしと云渡されて右三人并菅三郎兵衛尉同太夫八郎日本へ
事の言上目録頸數をも請取十六日の夜に入亥の刻の三番貝に南

原を立てウレンの湊にある諸将十七日に至る南原に逗留し城を毀
あり十六日言上目録記て後一吉一番衆の五人を召出し大に感嘆
有て渡海十六万騎の先切し其上大将を討事手柄の面目何と
かいふべきやとて様々褒美を下行し大河内には其上に馬共餘
多引寄毛付して与へ玉ふとあり大河内馬を拝領し大に悦身あり
余て彼の疵は指の痛をも弁ずして髪毛を以て馬の毛を取り鞦玉
世乗て見る所に近藤吉右衛門尉参り此通の矢の根を抜給へかや
と問大河内未抜かずと云へば近藤疵口遠ければ抜かぬべし下りさせ玉へ
抜遣しと云しかば大河内馬より下て左の腰の疵口へ毛引ばしをいれ
たふして巻て指入矢の根を志川ぬと挟き其毛引をば鍛冶の大挟にて

はさみ縄にて強く縮結て大挟へ槌を以て打抜けり。忠清道の府中宣州城も朝鮮人堅固に持たりと聞ゆ則諸将宣州をとりべしとて十八日南原を出陣し其道十四里一日一夜に乗付十九日早旦宣州の堺に押寄る処に南京落城の威風を聞て十七日に宣州の城主城内宿城を自焼し帝都に引入と云く爰に十日逗留し諸勢をあつて城と毀則あり加藤主計頭開有て西生浦の要塞に在しが南原を攻亟しと馳出る処に南京はや攻落し然れば宣州に向ふと聞て宣州へ急ぎ駈来より此度は南原の手に合ざるを以の外也。悔るこれより諸将手を分道を替て三方に国中をと働き先にて一不に集り相談を極帝都をと打破べきと評議まて飛脚する一吉主計頭清正

両軍勢雑兵共に二万余の勢廿九日宣州を立てセンケンと云所に着陣す 其道九里 九月朔日セニケンを出て曠野を押けるに向を見れハ二三里に引へえ真黒に備の体見ゆる一吉清正是を見て押も殺し化敵我爰ぞ討死に極るべしと備を止て兎角と評議せる所に小賢しき足軽落来を伝ひ行て鉄炮を放しけるに二三里四方に並居たる丹頂の鶴とも悉く一度に立て舞通るに日影を掩て暫時闇に成てそすり諸人目を驚しけり其日に立サンに着ん 此道九里 今日既に川水に添すり初より二日ぞ今宿陣まで 此道七里 三日全羅道の山合を押けるに数兵を伏置一吉清正が二万の勢を真中に誘ひ闇と前後左右の荻原草の中より我劣じと込出て切くる吉切川切もつ細川縦ま川火の花を散して戦ける清

正が先手の大将山内次郎兵衛伊地智次郎兵衛を初として軍士三
十八人討死をし一書に軍士大河内茂左衛門尉敵の大兵に組しを既に
危き処に乗ける敵の胯へ右手を入てけ揚返へしとせしがたくま
ばかりに小刀の柄手に当りしかば引抜て鎧のすきまより差通し志
あやかにえぶりなましかば敵堪兼て立上らんと則敵に引起されて終に其
大兵を討ねぬ大河内が具足の胸板は忽紅にぞ成にける其時大河内が
三間半の志ないへ組ける敵に推倒されよれ幸と打止て敵の持ける槍
の柄九尺に次て白き四方の角に絹十二中に付てぞ揃りける一
吉が家中に首数十八清正が家中へ五十一討れたる其日チンゾンと云所に
陣して其道程に三日逗留し晩日の手負人を看病して五日フシキに着道

六里　一二　疑ハ忠清　疑ハ全義

四里 六日尚州に陣す 此道七里 七日コランに屯す 此道五里 八日チンセンに着陣す ここゐて
是より帝都へ纔七里なり一吉清正逗留し諸軍の来るを待帝都を
攻べきと在陣せしめて続手の大将おつくチンセンに集り評議未極り
難きなるに蜂須賀阿波守豊勝云けるハ此度渡海の軍勢船軍に勝
利を得て南原の城を乗取られば是より帝都へ押寄敵を打破て
当年三ヶ度の法吉事の言上致すべしと云たまへハ諸将睨合て是非
の返答なかりなるに宛得たる一吉ハ阿波守豊勝が伯母聟なるに依て同
徐に批判云せん為に飛騨守云けるハ阿州口上聞召汝舟軍南京の
ちる殺攄宣妙の城を破られバ是三度の法吉事に非や其上チンソンの山谷に
て主計頭と某と大敵の伏よりの危き武命を捨ぬ諸大将数多

しといへども朝鮮大明までも名高き王升卧討死し物の数にはあ
らねども某も共に彼地に於て討干ける時に味方の競ハ落かるゝく
しまひて凍吉事に無よひにて柳帝都をも取廻し川面三十余町
の大川ありと聞けいまだ厚からずて時既に寒し此寒さ天下向てお去ハ
横帯をとひさし馬に太股をとせさせて氷をと割りけれを渡りにハ人馬忽
に凍て怪ふき武命を川の不曝し何の益かあるべき縦川を越得
たり共敵に打合事成難かるべし又帝都より二百余十余丁をと隔
て斬長陣の時日を送るといへども帝都より一騎の軍候も出さ
ばふ事如何様不審なり先ハ上意其趣に貌ぐて只命をと全して
勝利をと好かふ之様本意なきよりあらく引取て数日の長陣苦労の人

馬を休め春陽の気に向て諸勢を進め帝都へ押入て打破る
べし何の子細か有べきと各如何にと有ければ諸大将一同に此頼もしき
言葉に尤と答て各備陣にぞ極りけるに爰に五日逗留して小西の
士卒等わく山谷に分入て濫妨し生捕餘多連来るに依て帝都
の様を尋聞には都には大明國より加勢として國王二人来る一人は麻
老爺王とて馬上四十万騎の大将又一人は胡老爺王と云て十万騎の大将なり
其外将軍判官諸軍兵悉く競ひ集て王城を守護し日本の軍
勢を都に引受べき一戦に決せんと鉾を磨き鏃を礪き楯を
かざり物の具に風を引せじと待かけけると語る諸将上下に至るまで是を
聞胸を冷して有ける故此一説を聞さは[illegible]飛掃き帰陳と下

知されまし事天晴文武兼達の剛将ハ世祖光武の心根を写し得さる人なりとぞ感しけり

九月十四日諸将チンゼンを立此處ハ富有の地と見へて家数十餘万間あり則放火して又各三方に別て海岸の道にぞ赴ける一吉清正チンナンといふ所に着陣す（此道七里）十五日全羅道の府中ホヲンに着（此道五里）此所古府なりけれバ在家二十余万ありて又少地の山城あり城主開退けれバ城中宿城せ家放火す十六日ホキノに陣す（此道七里）十七日カロウに陣す（此道五里）十八日チンミンに着（此道五里）此所にも古城有て城主ハなし十九日山谷を乗出しかしき原に押掛る所に此敵七八千出て清正が先手加藤与左衛門尉と合戦し与左衛門尉が組下の

軍兵野合に乗放し置たる馬共二三十疋濫れて山谷へ引入ぬ自慶
尚道の古都に着陣す此所ハ昔帝都の旧跡なれバ家風も殊勝なり
浅軒を争ふ高屋三十餘万煙ありて大佛殿を建立せり本堂の
柱ハ五階六級の石の柱にして廣き事日本の堂塔に勝れたるよし
三門の高き事本堂に越たり夫ゟ己山あり此大道の廣き事寺
々の立柱家居の作様何に付ても数人目を驚かし計なり爰に
逗留しけれバ廿日の朝大河内茂左衛門尉陣場の東中に出て
山中に入此彼を一見し道に踏迷ひ夕日に及て帰りけるが知ぬ
山路の事なれバ夜に入道を見つけて何を更に弁ざるが叢に
陣火の影多く見ゆる味方の陣とおもひ火を知べに出ければとある

柳原に敵漫々と陣取居て人馬の食事にも用意せし真率く
ありける然ども天運にや依りけん恙なく虎口を遁て折々朝
鮮の洞をたちひそく窃に忍び通りける去ども月もなし闇
夜に娘も失ひ味方の陣何地なるらんとたどり来る所に又人
音遥に聞ゆ夜討に出る敵なるべしと思て能々たちありを聞バ日
本人の聲なり静に立寄誰と問答て曰是ハ清正が軍士成が
昨日の合戦に馬をとられ無念さに敵若夜討にも出るのとおもひ
見来てたと答大河内伴の敵陣を教て曰我只今陣にて見
てけるが既に炊で未食せずと見へけるぞや然るべき時節なり鉄
炮頻に打掛儀に時をと上て無理を手立に利を得給へと某

道知らずに案内せんと云ければ各軍士悉く御殺に逢てけり伊達ハ
御帰あそばし給へ御供中若も御奉行の方々を深手を負せ申さハ
某共陣並へ帰る事成難しと所々まては大河内ぬと云別かたく成
の刻計にやうやく本陣へ帰り加藤清正の軍兵思ひのまゝに討取ま
し馬共餘多濫取首数少々討え勇進んで帰る廿日の早朝大
河内が小屋へ各一禮に来る清正よりも一礼の使ひを給りける廿
二日大佛殿を先として洛中の在家三千余萬軒一宇も残さず
放火しけれバ夜中に及とぞいへとも焔の光遠里まで耀て只白
晝に異ならん廿三日古都をと立てコキヤウに至 此道五里 廿四日クノイに陣 此道五里
廿五日夜に遠雷あり廿六日シン子に陣取 此道七里 此にて作事寂

中の山城あり麓より城まで二里四面の石垣の高サ四間宛の中なり爰に二日逗留し城を破粮を焼然共塀中廣大也辺にして二百間三百間の米蔵限りなけれバ二万三万の勢を以て廿日三十日に焼尽し難き故に城中家蔵に火をうけ其侭にして通りけるを廿九日シンチを出て永川に趣く道五里余に来れバ弓手の方山谷合より少敵出て清正が先手に馳向ひ矢を射かけ鉄炮を打かけ鯨波の時を揚ければ清正が先手の軍兵共是を見て餘まで討とるへしと馬の足に任せて下へ立てし我組の加藤與左衛門尉正員を始として乗散しる若者共貝の音をも聞入ずして武略の敵ハ引色見せけると

実に敗北させんとしける山谷まで追入ければ谷間左右の山の沮ふ
あまた伏たる大敵一度に立上り鬨を揚て指詰引詰射立打立
られけれバ味方働くべきやうもなく引返さんとすれど叶ずして難儀に及び既に三州
の住人宮地久蔵と云者の大久保相模守忠隣が家に在しが不遇
に立去て清正が幕下に居し本多重左衛門尉と名乗此者本多大
音揚て数百の傍輩に云けるハいかに方々角一所に立徘徊左右
の敵の的に成て詮るに討死をとぐべきにあらず永川表の大場へ乗出て
實否の一戦に及べし各続けと云まゝに一さんに駈出る敵付出ければ
組で落上を下へと返しあり鋒より火焔を出してしのぎを削り鐔
をわり火花をちらして残る一吉清正一陣に成て数刻打戦ひ敵餘

多討れ味方も多く討死しに彼本多金左衛門尉敵一人と切結び暫
く戦所に絶の甲冑の籠手ぐるみに本多が右の手を只今一残して
切けるに既に太刀打叶ざれバ寄ける敵を組伏て左の手にて突
殺息を吹て居けりけるに本多が郎等来て頸を刎落し本多
を馬に乗せんとして本多常に心のきゝたる者なれバ深手負ける
右の腕先を踏へ三度まで踏切て捨んとせしを郎等色々と留止
め馬にかきのせ本陣へ退りぬ諸人本多が前後の働を見て天
晴大剛の兵哉周勃が有様も角やと感じける
永川の地形ハ川面十八九町の大河東の山の中より西に流れ出る
其北河水の深サハ馬の股をせむに此大河北の岸に付て東西へ百余

町南北へ三十余町の芝原にて人倫遠し爰に一吉清正も陣大川を後にあてゝ陣をし漸小屋掛せし処に清正流石の猛将なるが如何心臆しけん大河を打渡り向の山岸に陣をとれ一吉是を見て家中の兵を召集云けるハあの主計が陣のとり様如何なる了簡ぞや今日の合戦に辟易せしき清正に非ず不審なる様子なり川を越ねば手に一言の理ハ有べき事なるに一使をさへも越ずして悉く引越と云事が分別に能ず我ハ今日の合戦場を踏へ川を後に当て爰に陣をとらんと思ふなり何も如何と有ければ各畏て浄謹起て主計殿の陣住方に失念ありて不慮の雲を踏れしかるに似たりしと申ける万死一生の地にて危き陣取りと云共一吉猛き名将なれバ諸兵に

よく清て近所に大蔵の有しを幸と打破り大柵遠柵四重三重
丈夫に付て大筒中筒うけ放へ近篝遠篝方々に焼て敵の寄を待
けるに一吉大に喜て十万騎の来るとも恐るべくハ候はねどとて勇け
る清正是をきゝて使を越其許の一揆りむる是原に向陣を
は此方へ向越はる然るべしと云越る一吉人を労てはい是に陣をて
悉委細明日申述べしと答又清正其部金吾を使として云あ角
し方へ御陣を替らるべしと背られば一吉其詞をと召出し数度の旗
使ゟ云入満足致は乞去り種に有付は同越まじき由清正の申へし此宿
に金吾更今晩ハ馬の鞍を外し何きも物の具を脱てゆる〳〵と休息を
延し飛弾守が討死せし内ハ其方へ敵一人も通さまじきと荒

らるゝに言る其部ゆへと等く清正大川を乗越来て一吉に対面し
事は陣営家中の小屋〳〵まで申付ては是非は同道致すべきゆへ再三詞を
尽て申ける一吉答て軍士とても苦労致し柵の下まで付出しは
を空く今更越難は今夜は爰に一陣をかまへ有なれば清正是非なく
又本陣に乗帰りぬ一吉が軍兵外がはの柵の内に人の居長に穴
を堀面〻一人づゝ穴の中に忍居て前に大筒中筒ならべて数か所
の篝火の光にて十余町が間を見わたし敵のさわりを聞知に安楽の
ごとく夜半過る頃敵群り来て三方を乗廻りけるを鉄炮をもつて打
響し近付て驗散さんと待うけゝり敵多勢なりと云へどもやゝし勢
に辟易し陣のあたりに寄得ずして夜已に平旦に及ければ敵も山

壑へ引入ぬ一吉又軍兵ニ向て今一日逗留せんと思ふ如何有べしと云
皇各悦びて縦百日滞共ニ意ニ任らるべし夜討も容易なる事と
呼ばはるとぞ答けるニ角て彼大石を見れバ横十四五間竪五六十間ばかり
て厚サ八九寸の板をならべて四方を囲ひ四方まん中ニ立て四口三間宛の
戸を立て二尺計の唐かねの錠をおろしけり抑此石ハ先年文禄の
御征伐ニ丹波少将秀久御加藤遠江守此所ニ於て合戦し日本勢
数多討死ありし跡其甲冑戈戟鞍鐙等ニ至るまで悉く取集三千
餘人の枯髑髏とも是へ此倉の内ニ納め置けり石面三尺四方丸く磨石
を地ニ埋り立たるを文字を形ニ切て其石ニ其時の年号日付合戦の
趣きを大文字ニ切付たりしく衆ニ清正が軍兵解江庄蔵と云ものあり

彼が父庄蔵ハ丹波秀久卿に仕て此所にて討死せし彼が指物も長サ五
尺條の一の條の葉角木に蟹江庄蔵と書付て有けり清正の軍
兵も来て此倉を見捨しかれバ庄蔵己父の指物を見付出し悲涙頬に
流しけるが左るがら父に對面の心地して自小屋に持帰り傍輩に
向て云けるハ父戦死の跡を見る事浅からぬ事なれハ命を限りに
敵を人討て己父が孝養に報ぜんと主君へ暇を云置て毎日の
夜戌の刻計に立出る諸人色々と制しけれども背て思ひ止らずして
大川を打渡りそこともしらぬ山谷へとりて行しを哀なる
かりける折に日比近しく云通ぜし傍輩二人見ぬかし難くやおもひ
けん馬を早めて乗續ける庄蔵是を見て夫ハ如何する事ぞや

某が親の為に捨身の思立るをバ各ハゆるし給へと頻に言葉を
盡せ共各人止り得ずして只三騎割入けるの内ぞ有難き角
て三人馬より下立て轡の際を止め手綱を以て馬の舌を巻掛
音さへせずして鎗の塩首を握一詰打の谷合に待かけたりけるをバ
孝感天心を動しけるにや夜討の敵の何心なく一人双ひ來
る所を三人勇掛て突伏る續て来る敵ハ外謀て闇夜なれバ
多少ハ見へざれバ悉く引退ける其隙に三人面々敵の首を提ける
引寄てひしくと打乗けるが鮮に父の敵なれバ止めをさゝせ
と立帰敵の死骸を引立て脇より鞭へ指貫き望所を射候
此男で陣に帰りぞゐりたる諸人是を見て希代の手柄無類の

孝行なりと感涙を袖に流しけり又二人の傍輩命を捨て万死の
友をうちすて剃高名し其身堅固に帰る事古今ありがたき勇士に
清正を初て涙を流し給ひけり扨清正の本陣には一番貝二番貝を立
ふりといへ共一吉の陣に貝を立けるに依て清正も押前をゆるく
らる十月朔日にまで逗留す一吉が軍兵曽て眸を交へずして西が
陣所を守りけれバしかしに永川の敵地に悠然としてし在陣すと
いへども敵終に近付得ず一吉軍兵に向て曰此表を出る夜中
に川を渡さバ敵川の瀬ハ知まじ川水に乗ひろて夜合戦に結
べし然八月なれバ敵陣方見分難く見若うるべし明方の卯の刻に出陣せ
急しとあれバ諸兵畏て二日の曙に小荷駄夫丸等足弱き者共

残らず先へ渡し軍兵共一方に向て乗馬を渡さるべしと云ければ
一手乗しう川て軍士一同に越べしと云り軍兵又云けるは此度も
類の浅瀬を知らざれば此上のかくめと申せば川越さらに極まり早く
越あつて向の堤に乗馬を立らるべし若軍兵一方に越の時
節大敵出て乗馬を募ひ川水に乗入鉄炮を打掛戦を挑
て敗なば出る所を違ざる事有べし其時清正乗加勢として
出張あらば防ぐ事に有べしと理をせめて申ければ一度にとて
旗を進め乗入向の岸に立備ふるを見て軍士本陣を先とし
小屋悉く自焼して川の半に乗入ければ案のごとく敵一万余川
岸に乗出て鉄炮を打かけ寄り軍士川中にて敵の方へ馬を乗

向井関を城とよせて引退し静かくと味方の陣へ東上よりハ一吉清正を
先として諸軍兵あらそふて古今無双の退振とらぞ誉ありける其
日永垣に陣を取（此道六里）此所にて又野合の合戦ありしか大将一栗に成て戦
敵少く討取味方も少し討死す三日慶州に著陣し（此道三里）此所ハ常なる
の旧跡なれバ門楼の数中大仏殿甲ぐ明に霊並験殊勝の寺とも崇
甍を並べ洛中の商屋洛外の民屋三十余万軒有て富貴の地なり殊
五十八階ある楼あまた楼木の当る蓮花八九尺四方を丸めくにかと
南此ハ不遠（仁王）当し林に中殿を先として一宇を残さず焼失す七日キニアと（舟陽）ふ
陣を（此道四里）八日慶尚道蔚山と云海際まで帰陣を（此道三里）此所にて漸道と
云自由第一の地なれバ寒なる越年をべしとて海を後に当て小屋

を丈夫に掛前左右三方に二間口の赤い堀をほり大柵五重に付立し出入の口ゝ千鳥にあけ遠く柵一重その口ゝに大須ゝ丈夫に立て柵の内に六数ヶ所の櫓をあげ遠見外ぎて番を置柵の外に八五ヶ所七ヶ所に篝火を焼明しける

朝鮮物語巻之上終

朝鮮物語
中

朝鮮物語巻之中

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

十月十日上将軍秀詮公より黒母衣の御使番太田小十郎をもつて蔚山太田飛騨守が本陣へ下され上意の趣ハ此度奥國中の働よ飛騨守首計頭數人に抜出忠節の段肇て討るべからず君臣の義を重んず其身武命を輕ずるが故なり爲人備に附おし澤井十郎兵衛尉瀬尾右衛門尉が口上を以て聞于の次第近日言上に及ぶ一此度秀詮渡海まをといへども釜山海の城主に仰付られ一に依て國中見物まさる事能ハず世に御奉公を遂らるまへはるかく渡海

詮なしせゑて東西の先手ニ新地の取出を云付べし其上然る倦き地形を見立年内余日なく寒天なりといへども追付出来せば頓ニ申付べき旨仰下されける飛弾守承り誠ニ以難有御諚なれば御先手の城仰付らるゝ趣畏り奉る由御請申上ける月舟合戦言上せし日本よりの御返事南原落城言上の御返事小十郎今日持参せり飛弾守封を開き見て公御感浅からずして舟軍左馬介又七郎一番秋月三郎高橋九郎毛利壱岐守二番と定下さるゝ南原先乗五人の者共ニは褒美として判金二十枚御羽織を添られ下されける大河内茂左衛門尉一人ニは判金三十枚御紋の御羽織を成下さる各面目身ニ余けり

飛騨守主計頭蔚山の地形を見立急の普請あれバ吉日を撰ミ
乃ち十二日縄張鍬初を浅野左京大夫中納言輝元が先手完戸備
前守安國寺ニ丁場を渡し各二萬三千餘人の人数を以て風雨を
厭ずして急ぎ上旬飛騨守下知して飛騨守主計頭人数を以て蔚山城廻
堅ふ大柵二重付廻し四方櫓を上ゲ堅くなり其時清正ニ向て御急の居城
人少ふしてハ如何あり其上長陣の苦労するゟ軍兵を召連帰城有て
休息然るべしと言り主計頭承て此事もつともなりとて一吉守護の為加藤与左衛門
尉同清兵衛尉近藤四郎右衛門尉ニ鉄炮三百挺付置西生浦へ渡
着なり秀詮卿として西の御先手順天の城十八日より鍬初あり鍋
島信濃守寺沢志摩守松浦肥前守合て二万三千七百人の人数を以

筧和泉守熊谷内蔵允を旗奉行として押立る東の旗先ハ蔚山の
城と其間海路一百七十三里あり
飛騨守栈木を代て左京大夫幸長に合力せんとて二千余人の人夫に
軍兵二十八騎を奉行として旗七本鉄炮三百差添て毎日
入ふ〻に清正幸長宍戸備前守安國寺ならびに人夫も付従て薪切に
入山せし十二月廿四日蔚山の乾に當れる大山へ登しと二十八騎の士人
夫を召連江川を渡り義川原に集上る所に弓手の山の頂に人二三人
立て旗を揚て呼何事ぞやと問けるに我輩ハ金吾殿が家人成が今
朝より鶴の羽ひに出ける所に存の外なる大敵出来り辛命を
然りて遁て此山へ逃登りぬ各の旗先を見て乾の大山に引籠るあ

の山中には敵必定居るべし其心覚悟有べしと数百二十八騎の其中に
如何なせんと評定しける者多し又其中に能大敵引入ありとも枝
木切らで有べきやとて彼山へ分入望に叶枝木思の儘に伐出し先柵陣
所遣し張番の軍士も麓へ下りし処に敵三千余山中より討出大山
の中半に備を立て四方の者を上目の下に見て雨霰の降如く射掛
打て麓なる南北へ五六町東西へ三百余丁計の蘆原あるが味方の
小勢枯野の芦の中へ逃隠居たりしが此芦原を乗出二三丁が内にて
討亡さるべし大敵なれバ合戦にも弥以及難し兎やせん角やせん
と寒天に汗を流しかしめて内に張番二十八騎の内福地が忠尉
山崎左衛門尉末士一人三人の奴原夜など寒死に極め一生の楽も果

ものを呼ハ帯つるぬく加勢の者共後日の高言を聞バ生する甲斐なき
るりしめ何なきと一同に思へる事に大河内枯るゝ萱をとりくゞり
口薬をとり付して火縄の火を付て落しけれバ人長を越る枯
蘆影く燃上るを幸と下知して回諸人駈廻て火を放てしかれ
バ騎るも歩卒も諸ともに飛翔て火を付る折しも南風
頻に吹て以の外に燒立炎敵に吹かけしかバ敵こまり切ぞして備を
少し山の上へ引よる味方五十騎ハ歩士共若宗を出て軍の途を遮しくる
纔なる勢にて勝鬨を出どあちこち静に引とり山なく
打合矢叫鉄炮の音海越に蔚山へ聞へけれバ清正の軍士山田勝
右衛門尉只一騎鞍馬鐙うけ合せするを幸に障泥を指ぞ江川

中にて一散に馳来る所よりも追ふに矢を負て弓を忘るゝもあり一騎が
けに駈来る然共大河内が下知せし猛犬にくゝ敵合の楯となりし者
死を遁て偽る虎の尾を踏で龍の鬚をも捋るとも角やとぞ
覚へし飛弾も加勢をと云付られし事を引退りけれバ早くも
出し事の様子を聞て枯野に火をとりて敵の楯に成と云事
日本に於て其方便をとりて誰か此武略を志すやと只今軍
士同音に今日前後の働ハ大河内林川村近藤手がらと申しを林
川村近藤各のいひ分ハ誠ともあれ曽て其とも存知ぬる事
にハ候ぞ正林が人申けるハ大河内が使を致しは芦原放火も偏に大
河内が下知に任せて從てるれと申けれバ一吉大に感じ玉ひ言葉仕

会と詫し候面々僅有故ふの口上勝く云んさ愚なり今の仕合ハ
人足一人も失ハず加勢の力を得し手柄の段今に限らぬ事なれ
バ満足に過るのミならず褒美として金銀八木を渡しける
扨明日より山入をなし候薪ハ面々馬舟を後の為に付し芦を刈
取べき旨云付しかバ先々ニ逃帰る福地山寄来一人三人の者共
戸外にて切腹の使を待居たりしも何の沙汰もなし其内に
惣て書付おけり一人の名を八書付る子細あり　然るに関山派の勤首座と云出家書物の
望有て大河内と頼渡海して一吉の右筆通じ付ハさる事多かり
吉と八大河内一吉と角と申けれバ一吉大に服で本陣へ呼て置きしに
通じ明かなり此勤首座一吉の仕置武道の差るを見て天晴ふ

名の大名不学の大智者文武両道の名将我思くハ十ケ國の守護
と成てあるへき人なりと誉て近習の士共其ハ如何と
問ければ答て此度も手柄の士ニ則賞を与へる事は唐書ニ
賢を挙ハ是ハ財を不惜功を賞する時ハ不移と書てり
一者の心ニ此趣ニ遠なく第一義者第二無欲なり第三道
者第四若氏の禮義明なり第五武道の達者なれハ諸道也
の貴将なりと揃て感じける蔚山の新城飛弾守急て未明より
極晩ニ至て普請場をはなれすして下知有しハ十一月の末つ
かた漸出来す本丸石垣の高サ八間塀の間数三百八十間二階門二ツ
矢蔵六ツ二十五間の長屋あり二丸石垣の高サ五間塀の間数百

三十五間矢蔵二ッ門二ッ三の丸石垣の高サ三間半塀の間数二百三十
間櫓一ッ門一ッ二十八間の長屋有惣曲り塀合て七百四拾五間惣曲り
の石垣の外に付たる柵の間数九百六十三間あり惣構南ハ海なれハ塀も
なし柵も付ず三方の塀の間数二千三百間門二ッ惣構塀より外土居面
に付たる柵の間数二千五百二十間惣構の堀面三間半深サ二間の中
堀の外に付たる柵の間数二千九百七十三間あり近邊一二里の内に
付たる木は抜に惣じて之の塀下地ハ七八寸廻りの丸木を以て竪横に以て
大釘を以て裏面より打抜裏を返したり雖堪大寒國成に依て
大工手傳の者共寒にあてられて手足の爪悉く腫抜るゆへに城内家々
の作事ハ延たりき諸方門の扉も漸く十二月三日より加藤清の人

足残らずあがて数日の苦労をぞ休めける

蔚山城之圖

廿二日廿萬責リ破ル

帝都に籠居する大明國の萬王チンセンにて日本勢を討とらざれバ良丈を怨念に思ひ殊に朝鮮の大王を初として大明の加勢ハ何の為に来たると上下の悪口言のゞるに不及の誹を恥明の萬王八十万騎を引卒し蔚山表へ出張せり十二月中旬の頃大きなる板を削て今月廿二日必其表へ出張し一戦に及べし各随分籠城の用意有べきよし手付擢元が先手の安國寺の陣のまへにぞ立てありける士卒ら常て讀得ざれバ安國寺に見せる所に安國寺其旨を知ながら立てありし札を取隠し組中の士卒にも知せ次己ハ病る事有とて軍兵をバ完戸に付て残し置小姓歩者廿人召

連突山に抜出釜山海へ退ぞけるに是に依て知人一人も無りけり
十二月廿二日寅の刻終の事なれバ諸人一炊の夢未覚ざれバ大明の大
軍不思不出に左京大夫幸長輝元が先手の大将完戸備前守が陣所へ
押入散々に切まくり寝首をとりて陣屋を放火し山合へ引取りつ然る所
不常の地敵とも心得て一騎もあまさじ討取べしと云ふまでに飛騨守左京
大夫完戸備前守加藤左衛門尉同与平治近藤四郎左衛門尉人数を
催し其勢二万三千余人敵の跡を追て十六七町乗出し旌旗を備へ
金鼓を打互に足軽合の合戦を致の足軽大将黒色黄色の折掛を
指しけるに幸長完戸と取合せ打合ける味方の足軽追へのぞき
敵の足軽一引ひいて踏止め頻に打立味方引ば敵付出て打出

鞜を打立て下知に従て足軽共少しも騒ぐ気色もなく小鷹の指
麾を付ざる如し近く引寄て軽き働成は飛弾守清水川の岸に軍を立其を見
て先は見事なる働かな軍兵の出立人数の指引地形に叶たる敵の
足軽の様大軍と見へたり是なる此山に上り何方をも見よと下知
せらるゝ軍監の使未上らざる内に八十万騎の軍勢は前の嶺より
乗下しける馬煙なり黒雲のごとく雲珠巻立て日本の愛宕山程
なる大山を此方へとうぞ打越たり飛騨守是を見て去ばこそ大敵な
り野合の合戦叶べからずとて兵を具足し城を堅固に持べしとおもふ
川を乗渡り要砦を具足し下なる川瀬を乗越けり明人是を見て大
将既に退たりと見るより早く八十万騎我劣じと乗出し関の声

諸共に味方の備を七縦八横に駈乱して大軍の時乃聲夥しく鐘
鼓の響音に耳も塞ぐまで大地もゆるぎわたり味方一戦にも及ばずして
係りに浮足して四方八面へ散々に破軍し君臣互に生死の行方を
知ず亡に谷深く峯高く岨巌石の切所なるが只一面に続たる大軍
に殺所なりしが今夫そ思ひ知ける左京大夫が軍勢は川の面の深
淵に馬人共に追ひ込まれ半ば溺て死にけり完戸備前守は手の者数
多討れ白鳥の馬取敵方へ奪れ三村紀伊守が二三人を召具し
退ける一吉は大河内茂左衛門尉只一騎幸長は小田莉小三郎只一騎召
具し馬験持一人道具持一人馬取二人付て引取しが餘りに味方討
死は大河内是を見て扨大将に請て申けるは御覧の味方多く討れ

此江馬主と云て豪の者と申せしかバ高麗大将馬を返し鞍を立直し見

るよりて味方少々落延ければ高麗大将も又引返す敵前後に充満

て然るに多く討れて大河内又も大将に乞て手を立塔も大水のめく

群り来る大敵大将と見て乗かけて指挟引つめ射るといへども

主従僅に四騎にて乗かけ討死すべきとせし只人の働にあらず見へけり

大将の馬験をとるべしと馬を放ちてる兵共我々と先をとけり亦

蔚山城と云所に堀口一間余りの井溝あり一吉幸長又溝を越に

留て馬乗居たりしが馬印を見て幸長の軍兵には神谷兵作菅太郎

此飛田権兵衛尉林十騎計一吉の軍兵には近藤長兵衛尉岩間を

所兵衛尉長田五兵衛尉山崎孫右衛門尉福地加右衛門尉など討洩さ

まで馳来る近藤鉄炮の上手なれば三尺五寸の筒を持て近付
敵を打ける早大敵入乱て大将の左右より取切んとす大河内一
吉に向て塗る紀伊に馬を立られしは見えて前後をと取切は早く城
内へ入て塀裏の陰に下知すべし爰にて敵五騎十騎討共何程の
事かは有き又今朝浅野宍戸が小屋数多焼しは御陣屋は敵に焼
しはえ不覚なるべくれ共少しの間ありとも小屋をともちて自焼仕る下
と云ければ一吉嘲と睨て高声に己何の功有て長しやうなる詞を云
ぞ一方の味方に非や己早く退べき寄詞るべしと怒る大河内重て曰
剛にも宜加ゐてあふべけれ眼に遮る程の事に功不功を云ふべき所にあ
の黄旗黒旗は何の味方にてゐぞや塗なく命を路中に捨るに

るゝを敵はや馳寄て落しも付ば討取らん其内に大河内に五ヶ所ふるれ
四ヶ所矢を射立らる九ヶ所の矢をも清て引返し引退んとしけれバ鐙
元の軍士備後國の住人三村紀伊守只一騎乗こらへ居て奇特にいの
ちひさものは去ども寄るふくれと云大河内君て頼みつくり残りけるに
急き引て入れと詞をかけて只二人殿して退けるに大河内が先
を蘆毛の馬に乗たる大将と覚しき敵横切て通る大河内乗かけ
切拂ふ敵其太刀を避るとてひきつきけるが深田氷の上なれバ三
村が前にて乗傾ける馬の蹄すべりつゝ屏風をと倒すがごとくに横様に
倒しけ三村則飛下りて押付んと理て敵の上に乗りのゝ大河内
をと告て某の太刀ハ馬の上人を志て當らん聊か付にハ非まで手あをと急ぎ

首をとれ給へと云三村瑗をとほせ上て首早く搔落し馬に打乗る
人悪さく厳して挑ずれば寡角て城へ乗入大河内福地が斎藤尉に
向て一吉公ハ如何にと問ければ福地しかじかと答る大河内已ハ早く乗入て善の
行場を知ざるやと云所に幸長の先手浅野左衛門佐備へ来りしが大河内に向て
一吉公ハ唯今あの日本町の焼跡にて敵に討まけせ給ふとぞ云ける大
河内聞も敢ず然らバ左様へ佐已ハ三國一の腰抜武者恥辱ちハ御奉行の上ハ
非ずや如何なれバ討死もせずと見捨て命助りけるにや恥辱なる討死せ
定めて今ハ大夫殿へ𠮷て首をも刎んと急ける処へ田中小左衛門尉其
外二人来り田中聞て大河内が云ハ又左衛門佐と悪口しけれバ飛騨守の
骨を拾んと四将海と共に乗出しけるに飛騨守も馬をとめて歩

立ければ矢三本射立られ塀と柵との間に跪て居たりけり小池新八郎清水弥一郎多田孫左衛門中村勘四郎等は前後を囲て守護し向に敵六七騎乗向て指詰引詰散々に射る清水素肌にて有しが主君の矢面に立塞て胸板を裏かく計二ヶ所迄うけゝれば田中大河内是を見て敵を討んと馳かゝりければ敵は皆引退ぬ稍一言に追付て此討死と覚りしかば角南殿衆に後れ筆のいきは早く立去る様々と各云く悦たる腕より清水田中大河内に向て莞尓と笑て胸乃矢疵を教て是を見給へ南原のかへりを得ふく能く合せるに非やいふに各昔日源平の戦に奥州の次信が能登守が細矢一筋胸にうけ息の下に此手為りと云傳へしハ備り成魚し其ハ大明の精兵が当

竹径の長矢束に大根をひいて忘迯と射切脊骨を割二矢束ありと云
ども少しも苦しからず常の体に語りけるに大河内田中大に驚て
主君を先に立清水を前にかけ城内に入ければ諸人是を見て天晴
大剛の兵哉南原に於ハ先乗し今又主の身に代り打死は志のほど
漢朝の紀信日本の忠信と云とも是にハ過じと誠ど殺りける聖朝遥に
死たり数人鎧の袖を濡しけり骸ハ土中に埋れて蔚山の塵と化すとも共
名ハ雲の上に聳て末代の聞へを驚せる類すくなき勇士なりけり然に一
吉ハ三ケ所の矢をとも抜ぞ流るゝ血をとも拭ハ唐して塀裏の役所に割込
西ハ太田飛騨守北ハ加藤与左衛門尉父子完戸備前守東ハ浅野左京
大夫南ハ海なれバ堅むるに及ハずと役所をぞ定めける角て大河内

花右衛門尉只一騎小屋場をさして乗出るを見て田中小右衛門尉
川村十蔵林角右衛門尉是ハ如何にと問大河内茂兵衛陣屋来敵を
焼されバ自焼せんと主君に申ける詞あり主命にゆるされざる傍
輩へ云伝ざる事に非ずて我一人行て本陣下陣焼払べき為なり
と云けれバ田中を初て各尤とて我劣らじと乗出し巳の刻の終
より本陣に至り夜中亥の刻に至るまで篝を焚小屋場を固に
持居たり然に加藤主計頭清正ハ蔚山より二百五十余町を隔て西生
浦に在城せしが左京大夫宍戸が兵過半討死し飛騨守を初て諸
将の所に大明人数八十万騎を以て蔚山を取囲みける由聞もあへず
清正黒糸威の鎧を着なし内冑の緒を締て小性十五人使番の

士五人持同二十挺出ける者三十人召連七反の小船に乗てはもんの馬前舟の表に押立操に操で押寄けるが清正大音を揚て今此時に至て水夫少しもゆるまバ忽海底に切沈むべし若時刻遅くして敵に船手を乗切られ城中へ入る事叶ハざるに於ハ船中の水夫をも悉く切捨腹十文字に掻切て城中上下の目をと覚し海中に飛入て則龍神と顕れ空を飛行し鉄火石を降して大敵を靡すべしとおめり進んで長刀を杖に突て歩の板を踏鳴し艫舳を翔て立る体ハ多聞天のごとくなり大軍の篝火にて波上を照し沖ハ白昼のごとくなれバ舟ハ漕し矢を射るに似たり既に戌の刻計に蔚山へ乗入ましき城持詰めゆる時節にて望のまゝ城中へ入ける清正一吉

不對面し斜ならず悦で云けるハ此城にて貴老一所に會と逢ハせバ後日其が配の有樣分別に不能ざる不角冥利にかなひけるものいと勇みける元來此城ハ主計頭が居城となりしきことの事なれバ餘所のみ見て止ぬ處よりてあし樣共大敵の攻を受て今明日に滅ぶべき蔚山ハ直に不乗入ける志し天晴大剛の猛將なりとぞ感じける扇て三大將塀裏を廻り諸方の守口を下知し敵陣を巡見しけるが清正使番の箕部金右衛門に向て飛彈殿の陣に篝火の有ハ敵入込たると問箕ハ畏てあれハ飛彈殿ハ柵の内に小屋を持堅め居られしと申清正飛州に向て如何なる計にや敵推入て討れんなバ城内此の外の弱りなるべし詮なき事をと申付られしとあり

其上此時ハ折紙まで八有るまじと云しかバ各咄てハちに其詞に随ハ流石の人なる法を失ひしや仮初の舟橋の押への番鳥や堤の引出の番遠見篝の番ふ至る所にわたり大将の墨付見せしてハ引入ざる武士の法なるにまして今己の胡より今ふ至て僅の少勢一生の楽を要くる大敵の中に万死の身と成て陣屋おする途もなく大将の判形も見せして引取竜よや覚悟ふ及ぬ事ありと散ゝ云ちらしぬ其部下を罷まへして急ぎ乗取り其趣を三将に言上に則其詞筆にまて今日の手柄比類なしと申文言を波まけて三大将連署の状其部又拘系に軍士是を見て去バ此上ハ小屋をと自焼して引入竜し土経を引纏ひ其詞左ハ先福

城へ入るべしと云けれバ箕部各〻同道申べしと清正が付〻勢を一同に乱
入座し又此小屋へ火を掛バ小勢を見切て敵推寄バ難儀なるべし各
の宿ハ其まゝ住給へと答る各聞て愚なる御詞今まで是に苦労掛
しハ此小屋自焼せん為そかし今此時の敵ハ足軽雑兵にてあらじ難し
早く我又路上へし若も路中に踏止て加勢立来とし給ハ其とまれ
引返し敵陣へ攻入討死までては甚不合点也とそ云ける箕部聞
て各の口上尤とハ申難しといへとも大事の所へ入ハ時刻移て危
からん各ハ其ハ取入ばとて足軽を引まとひ門〻へ入り掛各小屋〻
に自焼しけるにバ只白昼に異なく火敵兵を見て石火矢大筒を打
かけ大弓を射けるハ雨乃如し去とも軍士少も騒ず鎧の袖首を

掻りて足を乱けれバ引取ゟに敵五六十間ばかり三町計りし真黒に
見ゆる味方急ぎ取入んと見て間近く慕来りける殿を先とし敵に向て
二十間計なる後ぞきりに雑兵多く城へぞ逃入たる折ふし三村紀伊守大河内が
殺下に来て今朝相討の首三大将に披露せしと云大河内答て其事ハ今とこれ
披露に及ぶまじや聊以相討にハあらず浮と云ものを持参せしかバ三村兎角
に供申へしと云相討にてはなきさるものをと申合て高大河内ハ出けるに
三村首を持参して三大将の前に伺公して毛利中納言が家臣三村
紀伊守と申ものにて候今朝大敗軍の別大河内義右衛門と共に足二
人殿仕り則ち高名を立大河内と相討にすと申三将驚て扨今朝の仕
合に殿の上の高名と云事比類なき手柄兵言語にハ述かたし討

死せばして名を止める者共をとさへ今日の上ならで無比き眼きてと思ひ
しに如此の大男も人の手に高名勝てんとも思ずりと以の外に無興ならて
大河内申けるに八其切拂ハ太刀馬にも人に勝る當りは伴八郎討ける
案じ組伏たる故か一人の高名ならと申二村重て云故大河内が太刀馬に
當りは為依て某か前にて倒れしぬと相討と言葉をとけばひはるぶんかとひ
入るに太刀当るぬ共大河内が太刀風をうけそ其が前にて落ちたるか
く八某争で討取りんや兎角相討に仰付られ得と云大河内強て
我討に飽と云切清正是を聞て物も聞皮ならぬ争ひ或ハ奪首をとん
掛又我討にも無相を相討に仕たる世の中に二村が討と云ども
大河内合點せし古今無双の次第感ざるに堪ずりて主計が者共来

まこと呼出て能士の言葉を聞て明日死までの後学にせよと云く
一吉といふ紀州大河内といふ者に任せて此道一人の高名然るべしと
云清正幸長なと極りけれバ三村手を突て相討の将に付バ大
河内殿太刀影の高名を其一人に仰付られて此筆厚き中の誉なるべ
此旨を聞立押付も恥しくはとて立たり城内の上下声をとまきて
又類もなき剛者の詞の末の涼しさよと感ぜぬ者もなかりける清正
大河内を近付て此道若年なりと云ども比類なき一言お討百倍
まさりたりと感じ云もとより大河内は座を立て役所へかへりけるを三
将を初て近習の面々是に大河内三村が諍論は涙を催す事共なり
正が晋の六卿を目前に見る有難さよと重感に及とかや角て三

村大河内を待居て云けるハ明日の勝負を以て某が首に極る者文備に
御蔭と存一代の面目後世の聞何か是に過ん此後の為に是を持て
此今朝討残されし味方僅に五千に不足剰へ兵粮ハ尽水ハなし
角大敵の攻を防と云事偏に妙目に蟷螂が斧をもって龍車を止むる
とす此堺裏ハ叶難しあの金貴辺と云に不審を残し我出の山路の供
申故会領ありと大なる大河内聞て宜しく云るは尋常の敵なら
そ謀もあるべけれど殊に飛騨守が陣所ハ第一に敵付よく行路悪わなる
もハ某どもこ死出の先陣なるべし今生の面談今を限りと云捨て
互の小手に酒をせよ西にの役に立て別れしが今日の敗軍に味方
討死の者到る所一万八千三百六十余人なり然るを敵の軍兵も矢

五本十本ツゝ射立られハ無りける其余ハ各役不足の塀裏よ
鎗の鉋首を握て敵の責るをぞ待ける
去程に十二月廿三日卯の刻斗りなるに大明の霸王の本陣に息の貝
を立ければ早鐘突鳴し音に随て数千万共限りなき石火矢大筒
蔚山の城に差向て打ける其響城中ハ大地震のかく八十万騎の勢
軍一致に鬨を上ければ龍兵耳もつぶる斗身骨も忽に砕ぬ
心地して天地も崩も太山も金輪際へ沈斗に覚ゆる趣様の西北
東三方へ都合大敵一手ゝゝ武者ぶり備の色をとりえ先陣後陣の間
を隔十の八二十の六と云限もなく立随ける然に一手の大将申しけるハ
早雲霞のごとく群り来て楯を雌羽に突並攻る城内よりも

透間なく打立射ける程に敵楯を一度に抛捨斧鉞太刀刀とりて
立たりし二重の柵を只一時に切破り忽塀に付んとす城内の軍士矢ねりもと
挙て爰を先途と防けれども大明勢形儀を変へ命に構はず攻寄る
は討共突ども物の数ともせず乗越乗越進んで塀をどうと切破
しかば塀裏の軍兵ふせぎかねて二三本丸に取籠る商人雑兵大半に
我先にと逃入たる間大手の門にて七十五人馬三疋二の丸門にて二十四人馬
三疋三の丸の門にて三十四人馬四疋弥が上に踏殺しける城乗たる者は加藤
与兵衛治政は諸人の後に入れ入しが父与右衛門尉討死は使と成物
擒破まで早く此門入りてへと云捨し我は本丸に大丈夫章長の持
口へ乗込て章長を先に立入けるに章長の当惑無類なる兵に

て兵一人も引ずして入るが敵合近く成ぬれバ討て〳〵と駆来る与平治
その馬驗よ輪を掛て終ふ討せバ入るめし与き殿し二丸搦手の門ふ
入れる爰ふ大河内茂左衛門尉も昨日の敗軍ふ馬四ゝ所まで射れ
けれバ馬を城内ふ置ぶ徒歩立ふ出て引ぬる間忽然と諸勢の跡
ふさがりて近寄敵を切拂て本丸大手の門まで逃入けり三大将ら
定めたり塀裏の役所を定むる本丸東側大手の門左右の矢倉二丸
彈正一吉南側矢倉三ツ左京大夫幸長西側矢倉一ツ二十五間の
長屋二の丸へ下り口の門まで八加藤清兵衛尉二ノ丸主計頭清正完
戸備前守二の丸加藤与左衛門尉同与平治近藤四郎右衛門尉と極めて
各塀裏をとぞ堅めける敵の大軍畢竟一手攻で入引退き一手攻て

入替入荒手を入かえて辰の刻計より夕日に及まで六度迄寄て
攻よりける籠兵代々味方なかし一息もつかず火大炮を出して防ける
扨城内への通路を取切て陸手の押として十万騎舟手の押ハ
十万騎を定けれバ誠に鳥ならでハ城中に入べき術ハなかりける
小西籠兵寄集て評定しけるハ抑今日の大攻に敵せし八半計見え
角大敵に五十重百重の限もなく囲ミ居て命を惜む事なふ
ドいざや今夜夜討に出んと云合せ田中小左衛門尉二の丸に行清
正に向て唯今夜打に罷出れバ若本丸に取入難き時宜次第ハ二の丸
三の丸へ成共取入べし合言葉ハ是とぞ云ける門の両に仰付ら
まゐれと云渡し僅五十騎計密に城を忍出て夜討にぞ討さ

至る敵陣行儀正しく其討ざる所ハ戦といへども勝の謂よ
り加勢せバ鎗先を夜討の方へ差向て一足も去ず備を乱さず全
前ぎりに堅居ける間龍兵望のまゝに打ましく首ハ討ども鎗先
刀のけりを高名として味方一人も討れず引取ける敵夜討の手
立負しとて城内の軍兵夜の目を合ず塀裏をとぞ守りける
廿四日寅の一天より大軍ハ陣中催し渡て儀と立ならぶ敵方
より日本人と見へたる士一騎城山の麓まで大音上て云けるを
城内鳴りを静て誰なき節小地少勢の蔚山時刻を移さず只今
眼前ニ乗破く大将を先として籠兵悉く生捕大明國の禁中
を見物させんと呼ハり城中ニ是を聞答て曰夫軍の勝負と

云へ共多少によらず八十万騎ハ数ならず五百万騎が敵なりとも山
を越せずて討亡し両國王を生捕て我朝帰國の土産とし日本
大君へ實捨に備奉らんハ安かりと返答し頓て大軍一手備を為
三方をとり巻持楯をとしとこ鉄炮を打矢を射込バ大雨の塊を
彼に異ならず大河内茂右衛門尉塀のうへに登て引つめ引つめ射る然に敵
城下より射る矢ひで大河内が頤を射させり忍の緒を射切ければ
冑ハ下へ落けるを折節幸長通り見て手を負たりやと問まへるに左
程の事にハおよばずと云内に又矢来て右の臑にぞ射立ける大河内二ヶ所
矢疵を蒙り早矢種も尽けれバ塀のうへより下におり能よ大軍鳴物
を採へ管弦にて備の勢を立合せと等く太サ二尺余ばかりの大竹を十

文字ニ打違へ麻縄の太きをもつて家根裏の如くうちつけたるを割を
以て持来り照ニて竹ある白昼ニ大勢是をかつきたる也其石垣ニ只一
度ニ打かけ我劣らじと攻登る魔王修羅の戦も夜叉羅刹の怠ても是ニ
過じと覚ゆる城内の軍士土ニ付たる塀一重を隔て突落し別所
胸の板冑のはちニ当る所を幸ニ火水ニ成て突崩せ辰の刻の初より
申の刻の終迄て七備七度ニ替て攻ぬれども敵の物具ニ当る鑓先よ
り突出る火ハ稲妻の如くなり誠ニ堪難き寒国なりといへども数
刻防戦の勢ひニて冑の内具足の下より流るる汗ハ夏の緒草摺ニ下て
ハ氷柱と成是をとめて口舌の乾を止屈しと手遣も浮ぞ敵門外ニ
ひしくと攻寄たる所ニて打破らんと欲ても籠兵指付て射立討殺けと

以どもみじんも疲まじく其死骸を踏付刎越て除りに強く門を大軍押よせ打敲しかバ既に上下に通しける貫の木も折べき許なれバ終士大手の門を開て切て出けしも嶮き城坂を二十間計追崩し火花を散して戦ける所に三大将矢倉より程近く見下し居たりといへ共敵味方入合ければ打立難けれバ猶もおし籠兵坂中に於て鎗下の高名十一討取味方ハ三人ぞ討れずして引かれを敵間もなく付来る味方鎗の鋒を握て二十間計其程敵に押付を見ながら後ざまにありに取登る故味方引入きたるを見て三ヶ所の矢倉より横矢に打立られバ敵たまらずして引ぬけり三将軍士に向て各只今の働り繪にかくとも筆に及難し大明の大軍も定て眼を覚すべし悲哉遠國異朝の学

摘河(がう)ぞ日本殿下(でんか)の御眼前(ごがんぜん)に備(そなへ)奉(たてまつ)らでと披露(ひろう)ありける十一人の首(くび)ハ名誉(めいよ)の高名(かうみやう)なり鍋島(なべしま)加藤(かとう)小西(こにし)等(とう)の大名(だいみやう)
寄合(よりあひ)て是を見て皆(みな)驚(おどろ)きけるとぞ

[illegible]

寄見て如何と問バ其杯一ぺんの水を代銀十五匁と云大河内各々り
水飲せへとこそ云所まハ各代銀なしと云大河内代銀某が持てりき候れど
飲給へと云しかバ皆人悦て飲けり各ハ先へ御越給へ某ハ代銀出して行
匝しとて一人跡に残り大河内方一盃飲ければ正しく水なりけれ共
金ハなしまがりなりにて通べしと思て己ハ勿許なき奴なる歴々の士に尿
を飲せたり沙汰の限と云捨て立帰らんとせし水商人大河内が鎧の
袖に取付大分の金にて候へバ下さまじ候へと歎る大河内理て只今金ハ
持ざれ共当陣へ骨折なる軍士なれバ與り籠城武運開くまでハ
某に預置候へ重なりとも来なりとも望に任せ如何程も充行べし若
落城に於ても汝金銀数く持たり共詮なかりしと色々に云聞せけれ

ども商人合點せず是非ともドけまえと云大河内無く己ハ耳の穴も
あかぬうけ答めハぞ金ゐまんと云まゝに鑓おつ取を見て商人共の
外に取逢ぎ二の丸へ一ぐけに逃げ入ぬ大河内夫より帰りまバ各ぞ此の振
巴ゑしと一礼を述て田中不審を立て頻に問大河内答て愚なる
聞てかあれ此諸侍城に何をかりてきいべき理り云ども聞ざる故ちら
りて突抜んとせしかバ足早くして二の丸へ逃入けりと語る役所に寄居
ゐる一吉幸長の家の士一度に手を打て大笑し我も人も見ゐまど去
代無もバ是非なしと打過る所にきりとく八出らしゐると高笑の音
を聞て一吉幸長より喧嘩しけるやと使を立る其中に田中少し
も笑ハずして草摺をひくと打抑も無念口惜きれを飲くるに扨我

此水ハ某が各に無用る所の名成をと申分年にも足ざる大河内にて
めかもて添耻しさをぞ云しかバ其顔詞がおかしきとて又大笑をぞ
しけりき三大将も是を聞さて便なる仕方が籠裏の用に立奴
ハ非まで尤也と笑[リ]しが清正幸長大河内を見る度毎にいかに大河内
汝此頃ハ水高に仕給ふやと云り大河内その言により水高人に出逢
ば籠城の働の堅めハ第二に致し先水高に立組申度と得共高
人に逢ハぬと答てまへバ扨高させ度事よと日々の穿鑿に成にた
ふ夕暮に成者れバ一吉幸長の軍士寄合夜討に出べしと談し極
め大河内二の丸より清正が向て密に合言葉をと云合せ五六十騎馳
出て敵陣をと打散し端てみて高名し太刀刀玉薬数度次下を濫

として事故なく大手の門より入にけり
秀元其日討れたる刀の鐔ハ赤銅の木瓜に真鍮の覆輪をかけたりその
鐔を上帯に結し居たりしに諸人是を寒くひくるきに其鐔ハ
何の為ぞやと云秀元答て愚なり各大明八十万騎の攻をうけ
けきつて出類なき討死成ば万に一円も運を開かバ子孫に伝へん
と云けれバ各大に笑て妙豆をはあるとも此城運を開事ハあ
らじ捨給へと云しを秀元是を結しなかゞら死すべしと答
て捨ざりける不思議の万死を免れて帰朝し二尺一寸備前
法光の脇差にかへて世悴造酒允秀連に伝たり此法光ハ
元来刀にて父善兵衛尉政綱東條の合戦に帯し兄足立善一

所政定上田の敗軍に帯せし刀なり其を秀元伝りて南
原の城にて朝鮮人四人の股を切て落し又判官にとゞめを差
又蔚山にて大明人を切より日本にても秀元手にかゝる日
本人をも切られけれバ三國の人を討し名誉の刀なり
廿五日未明より大敵一手となり替りて申の刻に至まで透間なく攻
ありしが城中の籠兵堅固に防戦し塀の臺木より上へ敵の首を
あまた残し先より火を出し玉の汗を流し突崩し其日も敵の兼又
叶はずして将軍判官あげ麾をふりしかバ巻かへして引取ける籠兵
もなめ息をつきて休息をもなしける所に清正に添ありし商人
八木五升持出で高きに売加藤与平治是を見て買べしと聞

されバ米商人判金十枚ぶてはと答る加藤云けるハ此時の聚楽城ふ
争ふ金銀有ハきや我大小七枚の黄金をもつて仕立て候熨斗付
あり是をもつて五升の米をと買取べしと云商人ハ大小の腰の拵ふハ
俗物ぞと云けるを近藤四郎左衛門聞て大の眼ふ角を立て屹と
睨て忿ける者理非をも知らぬゆくな奴めが口上ハ媚裏らせぐ奴
ふてるらふし大河内が水をと害し例もありシヤ細首刎落サンと云侭
刀の柄ふ手をかけ走よる処を加藤押とゞめ先聞給へ理あり大河
内殿の水買もとめる仕合ハ上下知ざる人無き不今又彼を切ものならバ大
河内殿の仕方を悪ふ学ぶふ似るべし只代を遣まへしと残く云ける
商人ハ近藤が眼色ふ肝を潰し始るひやかき居りしが則大

小清れて来を渡しけり加藤其米を五粒七粒づゝ残さず傍輩の士
に振舞ける三大将を先として上下是を見聞し若年の翁の形
類ゐき士と感涙をぞ流しける一吉幸長の軍兵夜に入を待て又
夜討せんと談じ清正に来のごとく直談ありて清正云りけるは各此
中の飢渇に是も早弱るべし因八無用なるべしとありて各番て兵粮
未々果は渇を少し数共盗取彼兵の蛇に致さ色くいとて例の逞
兵ども思のまゝに打ありまし兵薬弓矢かく戦れてぞ帰ける
廿六日未明外がへのさゝかり騒かしく人馬の足音響とどもと人
ありへ聞へぞて月も曇り霧も深し闇夜に燈を失が如し敵の気を
計も城裏の剛士少しも懈怠せず兵仗を持き攻るを遅しと

待うけたり案のごとく不残うけ置し大竹の登り道二三ケ丸乃石垣へ掛一度に半乗上り大小岡を揚ける味方思まうけて待居れバ少しも驚ず時をも合せず静り返て待居たり敵弥呼ゝんで塀乃代木へ手を掛る籠兵一度に立向ふ面や冑や胸の板当る處を幸に突落し剝落て城所の別計に両王の本陣頻に早鐘責ゐましバ遠巻にして陣ぬくに引ける籠兵不審をなし今日の夜を早く引けれし八ぬ何の事やと云合しに大責の其間に枯草を山のごとく二三の丸の中に投うけ積上ありり一吉是を見て田中にて尉九津見兵蔵大河内茂左衛門尉をおして敵焼草を積置し八夜に入て門長屋矢倉まで持うけ必定焼崩るべき智略なるべし其方三

人二の九へ行て清正ニ相談をなし若清正延々の挨拶ニ於てハ三人密ニ
紛れ出焼捨べし敵吏を見て馳向バ是を早めて取入ば強て出じと云
ハ時ニより敵ニより所ニよるなりと細々と下知をなす二人畏て
清正ニ達てけれバ清正甚もたのミて存ずれども素ニ依て只今早々延岳
四郎左衛門と云付て遣しけ今に焼立バ是ハ是と出て見物し居へと答
置其内近藤火をつけ事悉く焼失し引入けり二人吏を見て清正の
返答を聞て立帰る又清正へ今夕も夜討ニ出べき由合言葉の品々を云
通しければ清正堅く制して手足の弱きニ寂早入ぬ事と云の三人
答て仰のごとくつとめ兵今晩計ハ出べしと云合せ帰り枯草焼けれバ
近藤が手柄乃階一言も洋ニ申ける角て城内食事飲水を絶て已ニ

五日ありけれバ上下飢渇に疲果て其人とも見へぬ憔悴しけると
不義の佞人有て三大将へ潜に申上度きと申一吉竒将へ使を立
て會合して是を聞彼者傍の人を退らるべしと申けれバ一吉田中
九津見大河内に向て立去べき由云りける両人ハ畏て座を立退く
扨大河内如何様此者ハ不思議の思慮を廻さんと見てありと思ひ
詞を急て一吉へ答て申ける八角大軍に囲れ只今に討死仕冥土の
御供申べき某共に何事を隠し給べきと荒らかに申けれバ彼
者是非なくして云出しけるハ城内已に米水なく皆飢き内に餓死せし
三大将の御命ハ士卒に次べきにはあらで上の御為御身の為速に城内を
御出有て後詰の勢を催し給ふべし幸に御馬三疋得バ是に召て

江を渡し向の地へ赴き責べき事ハいと安かるべしと答けれバ
三大将眼を見合て未返答も無りしに大河内聞や否や夫軍将飢
渇を軍士と共にし給ふ事古よりの道ぞかし而も此籠城と申て
遠く日本の地を離れ大明の攻を受て命を惜しと思召候や有べ
き日本と云共猶恥べし況他國におひてをや縦命を助り給ふとも
何の面目有て人にまみへ給ふべきぞたとへバ士卒の身命ハ大将に代
給ふ共大将の御命に士卒をバ代給ふべからず斯る不義なる申條ハ侍
耳に入給ふべからず孺子角の推參ぞと立退べしと既に荒声高く云
けれバ三大将一同に大河内が口上尤至極せりと同ぜられしかバ不
義の侫人手を失ひ面を赤めて退出し大河内座を立て馬有り

依てかやうの侍人出来るとて大音に舎人をよび大将達の配る引出せ
と云まゝに腰の刀を引抜て一ッ首を剣ける擒城内の軍士時に
をとり計て夜討に出る敵度ゞの夜討に手を焼て平砂に少衣をとし
き冑の上に霜を受眼を体にして鉄炮に火縄を掛弓に矢を取
そへ鎗の穂首を握て階に陣を固め居ける所へ鉄兵二ッ手に別れ
押並んで左右へ咄と打かゝり散ゝに戦てきのぎを剥り譚を破と
也これ大國の軍法仕置ニ爰に依て大朋咏方討せまじ故わ爾に隣
陣営て加勢をなし故に小勢の寄兵望のまゝに敵の一陣打殺し一味
方はこく人も討れずして引取しが陥るさこまへ残を杖に突よつて也我を
帰りける大河内は何も門を役ぬとして居ければ毎日一二度二ヶ度

切て出るに中も一度も人に先を越させず戦ひしかバ幸長の軍士
とも何卒して大河内が先に出んと互に心を励しけれバ飢渇
の苦労も忘れ勇士の志ハ鉄石よりも堅かりけると見えたり
驚きて付たり
廿七日早天より又大敵雲霞のごとく攻上る籠兵数日昼夜の戦ひに
疲れバ何とハ働べき突出し切落し防戦ひ塀裏堅固なれども
の刻計に悉了しかバ味方も息をぞ休めけるに注進の如に筑前黄門
秀詮公以家老山口玄蕃允を召て蔚山の籠城難儀に及ぶの由聞召
兵を下に捨殺べきに非ず急ぎ加勢を遣べし但此城釜山浦ハ
日本の運送自由第一の湊なれバ大明人蔚山の人数を分て当

城をほぜくと云事有つるに左有んに於ては若年にして
蔚城の方便を知ず又野合の働ハ拍子を見計て随分智略を
廻らす可し汝と寺沢志摩ちに是に在て堅く城をちるべしと宣へ
バ玄蕃允上将軍の御身にて勿體なき御事と制し奉りけれ共
御承引なくして廿六日釜山海を出馬なされ廿八里の其道を一
日一夜に御着今日の辰の刻計に蔚山近所の丸山に御備を立らるゝ
と等く筧和泉守加藤左馬介毛利壱岐守を召出され今暁
夜に入まで大敵の囲をを乗破り蔚山に入べしと仰あり二人謹で
言上仕るハ廿五日以来其趣を色々と相談仕候得共当大勢の敵に
ハ[illegible]ばハ力業にも謀にも及難く候少し時節をは待遊べく由

申ける相黒母衣の御使番両人馬にて御上の旨を仰付られ籠城の三
将へまふさる午の刻計に蔚山向の入海の岸へ黒母衣の武者二騎来
て扇を揚て城を招く籠兵南方の塀の上に飛上り何事やらん
と問ければ城内の三将并軍士共鳴を静めて上意の趣を承れと
大音上て呼りける飛騨守主計頭左京大夫面々の馬験を後に
立由旦を左右に構へ塀の際並木に手をかけ其外籠兵共塀の辺に立並ひて志
寄て掛りぬると有ければ大将軍の上意なり連日籠城の苦労
米水なくして堅固に城を防ぎ数度の武勇を奮ふ事叡感悦斜な
らず城内いかにも心強く思ふべし如何程の大軍寄来るとも即時に
切崩し忽運を開くべしと呼りて飛騨守大音をもつて御上使へ

申上るに付ても定に有難き上意を承り百万騎の加勢よりも城内競てひか様に前に然るべき様に披露致すべしと答けれバ上使ハ既に騎帰りけるに城内の上下上意を聞より大に力を得て一同に感じ奉り流石に殿下の賢息と云べき器量なり當年十六歳にて成せ給ふに孫呉が肺肝より流出し給へる尊将ハ四國九國の大小名五十六十に及て其名久しく人に帰るる大将幾人か有けるが此何ハ及ばざ十六の老翁六旬の少年なりと誉つ殿つ笑けるを一きがる中にて領地の高も無人柄千人にも勝るる男にも以の外腰抜て此彼と云ふに居居ふ奴原十人余りも有しが将軍公の御詞を現に聞て早く籠城も用ずと思けるに氣色かへてようやく

よろしく出てさまよひ回りけれハ川村十郎大河内茂左衛門尉
て押〻大将の下知ぞ臆病者の妙薬と見へけり廿二日の敗軍より目ふ
も見へざりし奴原が鎧よろひおもしろく可笑けれ如何に己等又敵が後
へ廻らんと左右にて眼を配り立所まであらき塀裏の役に立ん早く矢倉へ
行耳の穴へ石をあてゝまやかめと掟云ける彼十余人の者共物をも云
ハず頭をさげ走り回るに一吉清正折しも通りかゝりて足を止めて是を
聞て清正云けるハ人間の強弱ハ加程にも替る物かなとあざ笑ひ
給ふ此行ハ川村と兎も云れたる能次第と思ひけるにや清正幸長
ハ向ふて此辺の土木侯彦三郎昼夜の振を見るに比類なく見へけれ
萬事に附ても運送を開申に過分の加増し給ふべし又此辺の家老

歴々と見へける男二人昨日の大攻の内に働き更ハ思ひよらず一縮を脱
捨て紅繪のかたびらの紋有大夜着をとり紫のうちかけをとりかぶり眼に
佛すがた侍女にまぎれ泣きありきける所へ追ひ来て着たるをはがしの
あて彼奴原が家中の差引をもせし如くに大なる腰抜なり凡ならびとす
死ぬるハ幸ひ若きも存へあらバ急に首を刎ねよとぞ云ひけり
廿八日大明人大軍なれバ蔚山小地と云小勢と云旁踵を廻さず
と営に据り人馬腰兵粮ばかりにて取出さる事に城の外に囲り
し兵敵も城と等く飢ければ然も其数万騎の大軍終の小塀
一ッ攻落さずしてをめくと引退き事大明の恥辱と思ければ主
計に仕へし岡本越後守と云者去る子細有て日本を出奔し年比

大明に住して今度蔚山に向ひ八千騎の大将にて来りけるが彼を
為人の王の大使として今日己の謀計に授をへて云ける城内数百の
勇力は残る諸従等あり此六城を開渡して身命を助り日本大
王へ忠節いたさるしとあり城内より田中大河内九津見三人出て誠に
つべし互に名乗合て右の口上を聞大河内使書をきまへバ行て三将へ申し
と田中九津見云けるハと大河内同心に向ていかに誠後夜内を日本
の人なりしが柳や命が惜きとて敵に城を渡して北退法や有べ
き唐國ハいさしら須我朝に於てハ此例を聞ず其旨大将へ申されバ
己が身命助りたさに法る事を申とて怠るべき一定あり左の
如くなる臆病ゆえ諸大将へやくと覚悟に及びて城内水兵粮みちても

玉薬尽なバ大軍を以て攻らるゝんに何程の事かは候べき只
とくはかる一死を尉山に埋て義名を後葉に残さんとぞ云へる誠に
る其を聞て是非なく本陣へ帰りしが又乗来り三人を招出し大
河内へ向て此旨を詳にて余存にて此返答秀王へ申けれバ以の外大に感じ
秀王の誤謬なるを後悔せり寒天といひ大軍に囲まれ水に渇
し食に飢たる労兵勇士の道を立て大将の耳にだに入ずとて
事を感ぜるに堪かりその人の名苗字を書留べしと秀王即ち
此返の名を書留られ然らバ大明二人の王と城内三人の大将と互に小
勢にて半途に出合会盟し其上異議なく引退き互に飢渇の労
兵を息べしと有大河内其口上を三将へ披露し三将軍兵を召集

めん\/\/の所存おもひ\/\/申べしと有ければ異口同音に申けるハ迚も此城の
為粮五日三日を出ずして悉く餓死すべし左有んに於ては日本諸勢の
弱のみにあらず八ッの城々も力を失ひ朝鮮と一和の族もやあらん兎に
も角にも城を責落されずして大敵を靡かする此城内に至極の謀
利有べし人質を取替し堅約正しく而對面に於て然るべき事と
詞をつくし申ければ三大将我々もたゞ其思ひと上下一同に決し三
将より返答に当軍人質を取替し對面以後異儀なく馬を入る
に於ては南王望に任すべしとあり大河内其旨を越後守に言渡して少
し時を経て又越後守来て曰人質の望尤至極に得共去ながら城
中の三大将の内正人として一人此方へ出城も有るならば又大明大皇帝

の名代なるべし此方ハ王の内一人入城も難然らバ以下の人質ハ
もたせありし其上大國に偽りなきの條去月三日午の時に會盟と有ければ
城よりも尤と返事して其誓約に極り使ハ既に帰りぬ是より敵味方
矢をも止てありけれども城内にハ少しも心をゆるさずして塀裏を堅
めけるに然る所に大河内膳當ハ止て脚絆をはき居けるが脚絆の
緒を解んとして足首へ下りたりけり昨日も下さずして引上しめ結び
置しに又下りければ夫に心付膳肉落るぞと思ひ脚絆をとりて
見ければ只竹の筒を立たる如くにて腰の肉ハ少しもなくて骨に
皮のかゝるに計なり傍に寮に山川長多傳尉と云者並居しが是を付
ふるく常に頬骨あらはれて眼も大きに口廣き男なれども面をも見べやと

思ひ大河内山川に向ひ出て冑を脱て頬當をとりて面を見せよ
と云ければ山川答て敵俄に責ハ冑を着る隙あるまじきと云し
を無理に脱きて見ければ寔に何にたとふべき様もなき面躰只繪に
畫る餓鬼に異ならば諸軍兵是を見て一同に手を打て高笑し
又落涙ながるるもあり大河内云けるは此式にては敵一人合手になるまじと
成難るべし我氏神大菩薩を信じ奉ければ四足を堅く禁ずるが
此時の事なればしゐて死なんに馬の腹を切て矢の根に貫き射込
し矢共を薪とし焼て食しける諸人是を見ていかに大河内殿は
やと問答て我は味には構ねど力になさん為成ば石瓦共呑て唐人共と合
手になさん為なりと云ければ我も人も尤とて食しける程に四

五疋の馬の足程なく皆よしたれども大勢の事成バ咽を濡し
纔も無りけり
廿九日敵味方互ニ物静なり去共城内ニハ昼夜眼を合さず堅め
ける城内武波の矢倉下道脇の日表ニハ士足軽人夫等ニ限らず
飢渇の上の寒難ニ痛て五十人三十人づゝ後へもたれ又其跡へもた
れて頭を低ふ伏居けるを数を知ず早二三日も身いごきもせ
ざれば塀裏廻る軍士鎗を白らかしつゝ突て見しに裁日もうごか
ざりしかバ鎗の石突を以て刎倒し見とバ悉く居すくみに成て
氷に閉られて死居たりけり哀共言舌ニハ述難き籠城なり角
て今敵責をゆるし休息の隙ありけれバ清正加藤与次を召

具し本丸へ一吉の元へ来て大河内茂右衛門尉と近付共三日懸橋大破の刻は當辺の顔ある敵の一人ぞり矢倉より明に一覧せし大手四門の殿は木島辺搦手の門の殿は与平治なりと云り大河内参きは詞を承りは也共某は曽て殿にてはいはぬ廿三日の大敗軍に馬数ヶ所射られ得ば出立の仕合なるに依ておのれが遅く取入ければ聊以て殿仕るべきに存寄ぬ明かれは家の与平治彼に参て心をとめ左衛門大夫殿を先に立て甚しく馬强に輪をかけ敵に打せ候しておのれは事是古今無双の名高き殿にてはと答けれバ清正大悦の気色にて太々矢はなし遠正直過さる人かな心掛あれ遅き跡に退る者をと殿とは言也則其日の為人をと敵と同様に書載なり掲城下を見まくば城内へ敵より射たる矢先

石垣に當り落積りしに八間の石垣二間余なる悉矢にて埋りける
奥國中押勧の道に助にて諸人大に濫妨れ秀元も日本帰朝の
土産と思て綾錦金襴八糸無僂緞子色々の巻物見て撰て今日
あて又明日能をと見てハ前に取ける少しも労をなる焼捨て類
みるに計をとすぐり取三百七十巻もおもり諸人悉く手に任せ取ける
跡にて八大なる所蔵ち皆焼散して通りる秀元母妙玄院へ上産に
とむけしける印子の釋迦紺紙金泥の類なき能筆の法華経
其外弓矢矢籠茶碗硯以下色々様々の朝鮮道具をも牛二疋に
付く蔚山の小屋まで差のく持来りしに八十方諸に追の上馬るを踏
殺しぬる体なれバ小屋にて拂に焼失ても其のみなりしに大閤殿下より

拝領せし由羽織黄金秀元重代備前兼光が脇差なりと
悉く炎上しけりき
一吉清正ナンセンと云所に逗留の内ちかくの軍勢をひきて山を取巻虎
狩せしに虎おそりかゝる向ふに居たる清正が軍士盔ぐるみに頭を食ひ
ぐまし小手ぐるみに腕をくひ死しければ忽に死たりけれバ大事に
軍をおこして所詮叶ざる事とて虎狩を止たりけれバ朝鮮にて
も虎がりの功を殊に大勇と定るなり又ホシキと云所に出て押よる
に二丁余りの田切有て馬の太股を責るほどなれバ泥をこぎて乗
渡す事成難しぬ河まぶきと云処に近所に大きなる所あり打
破見れバ唐木綿をつめ置たり幸と取出し二丁余の深泥を木

棉をもて悉くうめて人馬共通しける下〻人夫のまでし馬の蹄ふ
至るまでことく唐木棉を引裂作て用ゆり押陣の内ハ人夫ちまでも
不残鶴白鳥を初て鳥獣魚類等の菓子ふ至るまで日本ふて只干
菜を用ゆり猶澤山ふ腹しけり秀元ハ八幡宮を信仰し奉れバ
四足を用ざるといへども異國渡海の名誉の為ふ虎を腹しける
金翅鳥をとも食しける等事遊覧ふ大きなる事最艶や
ふふ所柄日本ふ名あるふべきなるし往還の道廣ハ三十五間二十
五間より狭きハなし一里の境國境ふハ大石をもつて八角ふ切て大
文字ふ銘を切付立てあり

朝鮮物語巻之中 終

朝鮮物語
下

朝鮮物語巻之下

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

慶長三年戊戌正月二日子の刻計に門外の坂下に物音出て聞ゆ大河内茂左衛門尉諸傍輩に向て扱に事寄油断の内に如何成表裏の術を廻すべきも知ざる處て敵忍寄けるとこそ思へ我潜に出て探り聞處し若も大軍近く馳寄て押入籌きに於ては其旨を呼ぶべし必備りを用べからず其一人をバ捨殺し堅固に防べしと堅約し門外に出て城坂を下り聞に岡本越後守一人の聲にて静に〆城内へやと云大河内忍来て候と云越後各御両三人へ申

段子細有さまかたりと荅ゆ大河内それを聞て是まて乗上り給へとて田中九津見をも呼出し三人事の様子を問ふに誠後ち云けるは我不肖の身也といへとも異國本朝の通使と成て此扱を申極むと云事大明高麗日本三國に其隠あり難し倩是を案ずるに武士たるものゝ徳に非んば有べきと覺悦の思ひ身に餘是けふに不思議の評定を聞ぬ某此頃大明に住して騎士八千の将となる其恩を計に山よりも高く海よりも深し骨を粉にし身をひしびしはふしても報ざるに足ぬ傳へ聞樂昌國ハ旧恩を懐て新怨をも燕を伐ん事を欲し此度爰に城内を見奉れバ清正の御旗あり我一度は不審を蒙りらく遠國に奔

まる身なりといへども君臣たりし義忘るべく次には其傷和の悪
名を遂る事無念なり故に後難を顧ず忠節申ては明白の後會
盟を出有べからず其故は大國偽りを好むといへども兵は詭道
なれバ彼王の計に八十萬騎の中にて大力の者を抜勝り會盟の壇
上に三人の大將を先とし悉く生捕て曹植の例に任すべしと議
るの間然れバ出有べからずと實に二心なき事なりとぞ告けり此家大河内三大
將の如くに行て此由を申ければ三將手を打て悉く大きなる悦びと
驚きなり飛驛を一吉返答に曰戰後門外にて登城有といへども
終に對面に能ハず殊更今夕の深進さりしとては比類なき文言語に
迷難し只今富貴の厚恩を顧ぬ君臣の義をもまもり士の道を立

らるゝ事神妙の至感ずるに堪へたり城内のこれ忠信にあらざれバ大王への忠節なり唯今太刀馬の褒美にも及ばざれども隠密の事なれバ持参も如何と延引きて此邊主計頭に募り錢立去て後切請知せる所其方の妻子を熊本の二の丸に籠て堅固に守らせ置なり若萬に一ッも武運を開き帰朝の身と成て角の忠節早く上聞に達すべし又此邊嫡子を則我後ちに受領し本知千石を三千石に加増し跡を継しむべし女子をバ人へ主計頭が娘として然るべき方へ嫁しむべし若此趣主計頭同心せざるに於てハ公方へ言上奉り嫡子ハ上へ出し亀しし女子ハ某が居城豊州臼杵へ呼寄て予が娘と成し日本國中大小の神祇の照覧を哲て偽更に有べからず吹畢りを褒美と思ひ能々と有り

聞ニ軍烈袈の大難と云ども辛苦望みの向後某月に掛るまじとて
涙と共に本陣へ帰りけり
正月三日辰の刻両王の大使として是も日本國人に覚しき士城下に
来て指麾をなして城を招く田中小兵衛尉大河内茂左衛門尉兒玉見兵
蔵出合如何に是ハ両王の大使なり午の刻も漸く過ぬれバ御用意有て御
出城あるべし其返答を聞て對面をとげ這ニ委儀あるべしとて大河内請
聞し城下に入て三大将へ披露して評議を遂ける處今日對面の堅約尤
候なり非とハいへども此二三日攻とゆるかまへを得バ軍兵競を抜し
風をひきて悉く病に臥其上ある人の大将も氣労に病む者一人出て
對面もめされに間少し相延らるべしと云り使者ひそうして両王

大ニ腹立し此间の攻を盗くりと云まゝに早鐘を頻ニ撞惣軍色め
き渡て太鼓をせめ螺を立て一手くの軍中ニ判官将軍團扇を
ふりて軍士を進め一軍城を巻て左右の手合せんと等く操ニすんで
攻上ニ城内よりも爰を先途と防ければ一軍攻入事を得ずて本陣へ
引退ば又一軍攻かゝる攻てハ引ひきてハ攻昼夜のわかちもなく二六
手を入替くて一息も継せず三日の午の刻より五日の未の刻の終
て操ニもんでぞ攻たりけり大軍の矢叫時の聲ハ響を欺き戦の
鉞戟の光ハ晴光の星よりも多く鉄炮の煙馬ニあがりハ黒雲の如く
雲塵巻挙て白日戊陽離し敵軍の旌旗天を掠め戈戸ハ平地ニ竹
葦を生し矢ぶり雨脚よりも繁かりしを角て五日の宵の间乃

月西山に隠るまで敵寄て攻ざりしかバ城内にも定て敵労て攻ざ
るらんと云ども又子の刻初の事なるに大敵声をも立ず投寄石
垣半登り同音に時をあげ矢を射込大筒石火矢を打かけ攻登
る味方早く取合突落し切倒も敵も味方も互に勇力を奮て火
水に成て戦ける大軍の寄の内にも蔚山の働き大地震よりも
騒し籠兵代る味方ハなし鎗を突引隙もなく腕の力も覚へず
流るゝ熱鉄の汗にぞ甲冑ハやすまり三時斗の夜の明るハ三年を送
るより遅かりけり漸篠目の空も明方になりけれバ敵の大将重
鼓の下知に従て攻手の勢ハ悉く巻かくし引取しかバ六ケハ七ケに
備を立て引とりけり籠兵是を見て早旗をもたせさき太鼓をせめ進

時三度揚けれバ切て出るとも溜て備をもなく千鳥に立跡より
てハ先に立用心の弁に見へしかバ籠兵一同に何を限りに防べき束手
足の叶時なや切て出討死し現世の隙を明なんとて大手の門を
押開く処に一吉章長駈出門の前に立塞り鑓長刀を橦へあはせて
引敵するに物に狂ふ各と段の外に急て門の扉を押へて自満充
をとぞおほしけれバ籠兵是を見るなくして塀の内走りの板に登り上りきるの
のゐまりたり巡見まてるに誠に入しと見へて流石異國の武者ひ
延やるるあり事ど云ありけり角て六日の早天陸の押拾万騎殿
して退所を大將軍秀詮公一陣に進ませ給ふ加藤左馬介毛利
壱岐守罷出て申ける御兵の先陣と有事勿體なきに付て

某人には先手を仰付られ候べしと言上す秀次公仰けるハ予渡海を
とげずして釜山海の城代に仰付られしに依て何の忠もなく無
念のみに暮しけり此春の追討頼ミの幸なり汝等が働ハ殊し
うしく菟角今日の戦場ハ予が心に任せ一人も先へ出るべからずと堅
仰付られ十万騎の備の中へ一文字に乗入殊に御使番乃黒母衣
二騎を蔚山の麓へ下され城内の三将を初め軍士誠に苦労なる者
雑き大軍の敵を請て恙なく城を持きまじきなると云事天が下
に隠るる名誉なるべし只今将軍追討あるに義兵足手の力弱
のぐんに一人も出さずして門を堅く打て塀の上より眠り見して
見物すべしと仰下されて又其次に筧和泉守幅文の小性母衣

出羽ると云ふ者ハ士あり丹波國須知の城主なりしが羽柴少将秀次
卿丹波の國主となり給へるより古郷を去て壱岐守に仕へ毛利与兵衛
尉と名乗て此戦場へ来りしが左馬介敵あるを切まくつて歩行立に成
て危きを見て毛利駈来り左馬介に向ひ敵を四方に追散し急
ぎ馬より飛下りて左馬介をこのきに乗て我も又乗替に打乗て十方
一騎を蔵て首数あまたに討れける敵大に利を失ひ敗せしを味方
弥勝に乗五六町が其間逢をはしらせて討散し敵大軍に負をとる
然ども猶強き友をとも国滑して廣き枯野の萩原へ乱入せしハ大將軍
清馬験を立られ鐘鼓の下知をとりて追打軍兵を止め勝時を上
させ和泉守左馬介壱岐守を召て宣ひけるハ此萩原に東西へ長く

南北廣く茂りぬれバ大敵必伏を置べし味方ハ勢ハて勝ニ乗じ長追し若不覚を仕出さバ今朝の働空くなるべしと思て乗止らるハ秀詮ハ扣分別ハ似つりやぬ何ハやと宣ふ三人承り此度初手の一陣ハ御自身ハ先陣の御下知を以てかのぬくの御手柄香頭ハ尽く難く存奉るぬハ只今御馬印を止させられ御手立大相國公御下知ハ六未三ケ度も勝りハと恐ながら感じ奉の旨言上もて秀詮公御満悦の御機嫌ハて今日の高名實検し注文ハ記ニしと仰て覚和泉が穿鑿とて遂て御右筆賀古杢て系る目録ふぞ記りる言上高麗國義川河原合戦慶長三年戊戌正月六日辰の刻高名日記

大将軍秀詮公御高名首數

七千百二十 御家老 杉原下野守 五百三十五 加藤左馬作 三百七十二 筧和泉守

千二百十 毛利壹岐守 五百三十 毛利豊前守 四百七十 相良左兵衛佐

七百三十八 但三 島津又七郎 六百七十二 秋月三郎 六百 高橋九郎

都合一萬三千二百三十八 奉行在判

味方の内討死 二千八百餘也

秀詮公其表の様躰詳に記有て言上遊しけるが御感ぞふかく各敵を悉く味方纔に一万八千余の勢を以て十万騎の敵を追ひ崩し利を得ると云事日本の吉事是を以満足のあまりあり大敵旧冬より勤労まてる故若干の軍勢を討まて引入ぬと様く仰ける間て和泉守に

家老下野守に向て云るやう今度大将軍公は具足初の合戦に三國無双
の御下知を以て討取る首數を鼻をそぎければとて此草深き所に
て捨置べきに非ずと釜山海の大湊へ出し小城を掛置數人に守らせ置
しと發云る所に斬りけるぞ又に備前美作両國主浮田中納言周防
國主毛利宰相阿波國主蜂須賀阿波守讃岐國主生駒雅樂頭同
伊豫守伊豫國主松浦肥前守土佐國主長曾我部土佐守薩摩國主
島津兵庫頭鍋島信濃守小寺甲斐守藤堂佐渡守中川修理大夫
等を初て其外各軍勢にて義川原の戦場に来り芝居に並て鼻
耳を取る事を見るに手柄の詮申上る秀吉公御覧有ていかに此等過分
の國郡をも下し置るとて八方用に立らるべきと御感ありし此前代未聞

の籠城を聞ながら其方等人馬をもて京城に残して後詰をなし勢を成
ざりしや十二月廿五六日の比に至り面々ぞ案にはかりみて丸山の湊にて
ゆく何の者か有べし又合戦支過ぎ此表へ引杖もぞうり出て大敵
若も取て返し一日の合戦にも結事あらバ如何働べきの所存なき
やとたふ念し色給へ諸大将宣之に誤けまへバ返答をもとも中上得
むそ頭を地に付て居たりける諸軍勢是を聞て扨も無据の
大将かないまだ十七歳にこそ成せ給へ御働の大わざ前代のためしさ
よと上下耳目を驚かしけるに其上より秀詮公丸山へ御備をへらる
又黒幌二騎蔚山の城へ下さまも籠城の体を重て感心なされ西生
浦にありし主計頭か軍兵をも早く蔚山へ入替し籠士を西生浦

の城へ移しまゐ人ゟ五人宛の扶持を帰国ゟいたるまで出さるべきと
永々の苦労休息させざりし又四冬廿二日より今日ゟいたるまで其間
十四日米水を絶て日々の大勇浮ゟ記し飛騨守一判を以て言上仕
べき旨仰下さるゝ三大将に請申上る使ハ帰りける然るに明州の大軍
悉く引退ぬるゟと云へども城内ゟ在留て油断せず山谷の間より又
敵出る事有べしとて上下さけまり返りて居たりし所海上数
千艘浮べる兵船ども我先ゟと押入ぶ城中より是を見て入ざる
らんと合図の早鐘を責けるとはいへども聞請皆々浪上よりゆくへけ
るが諸人餘り不堪して舟を湊ゟ押よせ岸の刻ゟ斟酌て
馳上り知すましたるも籠兵餓鬼の如く成手を取て胄の手交へ

指戴き掬ち浦山なと出籠城て又今夜中の攻の内石火矢大筒
八隅なくも打出し給ひけり三の丸の塀の上ふさ二間餘の大松
明透間なく指出し燈し事此大雑の籠城ふ比類なれ法度ハ
數く長松明の光ニて城の通ハ雀白昼ふ異なるし須二三本丸へ思雲
ふ包まれとなる程ふ見しかし一攻せむる度毎ふ此城ハ五間七間つゝ舞
上りしなハ遠ゐ井ふ高く成て打出せ筒音も雲中ふ聞へけれバ身
の毛もよだつ斗なりと語る籠兵共を聞て肝をけし云けるハ
塀裏ふなる軍兵さへなりけれバ松明なども出され事覚悟ふも及ばず
鉄炮ハ玉も薬も絶果筒を手ふ持そのまゝふし其澄ぬ様ふハ筒も
近所ふあるべうらじ又松明の燃跡も一つもなしと答へけれバ諸人手を

打て第一大君の御聖運天地よりも厚く深き故に日本の九万八千乃軍神捕籠て悉く義ある勇士に力を合給ひしと見へたり誰が所為とも知ざりしに如此不思議ある神妙の程おそろし雖然佛徳ハ魯陽の為に三舎を退き巖ハ貳師が為に飛泉も出ると識感しと奇異の思ひをぞ成しけり三大将加藤左馬介が舟大将の三上六之丞と呼るハ其品具に聞飛弾守一吉なりける惣して渡海以来の軍中人業にハ非ずと覚へたり殊更此城の稀を業まするに全人間の働にハ非ず敵より打し大筒石火矢大鉄炮ハ雨よりも繁かりしに城内一人も中て死ざると云物なし其上此神秘偏に秀吉公積善の仁慈悲より出る事と覚ゆ夫をいかにと云に日本

國中の神社佛閣大社小社ふ限らず二百年三百年朽果ぬるを所々の旧記を以て悉く造営仰付られ古名将戦死の旧跡を絶ゆるを改め葬りて継せ其外七十餘ヶ山の七ヶ所を成しを改修ふ命じ并ふ都鄙遠境の万民賤山谷路道山林の奢人ふいたるまで普く後世安堵の事に恵み天地に満て誠ふ日月の草木を照し降雨の國土を潤すが如し故ふ神佛の威力も強くして神風ふく大軍の国みを吹破り饑の飛兵枯木ふ花の咲くるとやらんの危運を開きし事のみり経さしとぞいはれける 一本此間ふ怪異を見る八幡宮ふ建られし旗竿柄折行ふ矢拾本五拾本討立さるハ母衣旗の絹ハ紙のごとく射ぬき打ぬき門の扉塀櫓のふまへふ射付たる矢の筈ふ筈をはぎ矢をつぎて貫るかかし一丁ほとこれ文あり 去程ふ主計頭清正ハ居城西生海の軍兵ハ加藤右馬允ハ蔚山の城ハ加藤百介生林集人佐森

本儀太夫急ぎ來て蔚山城に入替る飛騨守一吉先達て出城より二番左
京大夫幸長二番主計頭清正城を出る代りの軍士旗指物付ける程や
に城へ飾り水兵粮玉薬薪塩噌鍋釜等に至まで城内へ取入けれバ
三大将を初て義士正月六日の夜に入て舟に取乗り蘇生したる心地して
物具を脱といとしく腰ハ已にひと云抜て立居もしかねし押陣の時節
より諸人十半時にも終に眼を合ざるに惕て四月廿二日より今六日に
至つて曽て眸を交ず水に渇し食に飢日と寸の隙なく身骨をとく
だきて働けれバ早あさひもすがら眠りしかバ大軍の攻を夢に見て右
の柄に手を掛ゲ川ハと起て目然覚ま義兵上下に限ら汲みしまでも
む其あひさには大攻の夢を見る事三年隙りハ止ずりとの云事に大

河内が舟の船頭五郎右衛門と云そのおも湯を中椀三杯あたへて後
一夜をへざりければ大河内五郎右衛門を召て粥を呉よと責むること
云へども十四日が間飢たる事なれば其相を鑑て粥を与ざりけるを其
の外に憎しと思ひ只五郎右衛門を切殺し食事を心まゝに任べしと
思ひて腰ハ立ざれ共頻に呼けれバ五郎右衛門出て大河内が面色を見るは
間遠に在て云けるにハ其気色を見奉れバ其手討にもなさるべき体なれ
殊腹立たれ気色甚極りては得共先其思案しまへに前代未聞為なる事
なき大敵の中の其竜城中よりも命あるべきにあらざる所に萬死一生
の御命を拾はせ給ふ事誠に優曇華と存此上を荒き風にもあてず
いたひ能く養育しまゐらすべきと存ぜしに五三日の間纔く思

呂食子の御心に任せ給ハゝ忽に御命ハ草下大事の御命を空く陣中
にて捨させ給ん事且ハ御比興にハ今五三日が間を御籠城と思召
ハゝ御命限りハ五日が間ハ悪意に任せと覚ゆ亭と涙を流して蒼々に
大河内君当理にすゝめしまとて詞もなく只一討にと思し心も弱て
恥しく現の如くも伏にありき去年七月七日に着れし具足の表紐
今夕船中にてときられり今朝て大将の舟を初て蔚山の地より
三丁が間入海を隔て芦原島の洲先に船り掛りて繋て夜を明し
ける今日秀詮公義川原の御働に御供し大功を遂し御褒美とし
て左文字の御腰物皆具の御馬加藤左馬介にて下さる光忠の御腰
物を寛和泉守延寿の御腰物御馬毛利吉政を澤領も毛利吉

薩摩島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左馬佐右の五人の勢にて
皆具の乗馬轡頭各面目身に余りて悉く見へにけり
七日の早天に三大将の本船を又蔚山の湊へ押入加藤百姓士林隼
人佐森林下儀を先として城近辺数の打死を記しとあれば蔚山二三
町の内外にて討死しける敵の死骸一万五千七百五十四人なり籠城にて
飢寒に死ける者八百九十六人有し残り目録に記したる夫より三大将軍
士卒を残成の刻計に西生海に入津して大労を休める夜半の比蔚山
の方に当て石火矢共大筒共聲て云難き大きなる手勉有る故沈着に
是非なくして山海大地もゆるぐ立城内町屋の戸障子も悉くけへ
るなり又五更の暁になつて大明人二騎馳来りいふなるは我二人出陣の

刺より鉄炮の薬恰大山のごとく積おゝ不思議の天火きと以来を焼
失せ軍士も多く焼死されば我等とても弥火中に空しく成との説を
用ふ聞ずんば吉卿ふ残りし妻子ども一命を延べき為に潜に逃
電し命を助かるべしとて降参ふ及ぶ一吉聞て頻れの幸なりと
て清正幸長へ使を以招き明人を召て両國の總餘を尋明人曰今
度も王加勢として大軍を召具しつかく来りし甲斐なく蔚山の
小城を攻落し僅に剌若干の軍兵を殺し何の面目ありて大明へ
帰陣き近所に在陣して一同蔚山を打潰さんと議定し蔚山
より三日路隔て滞在の處に不思の外なる天火にて軍士数多死け
る大國の不運なり三日路の間の道すがら手負死人の臥たる事幾

千万とも云数を知れずとぞ語りけるに
諸大将西生海に集て評定しけるに抑今度蔚山の籠城に兵粮
を入る事を得ず又大敵の圍を得る事先手の城と云ふども餘
りに過ぎる故なり向後は蔚山順天を破捨て東は西生浦を以
て先手として西は南海を以て先手とする然るべしとありければ各
尤と同して連署の状を調へ言上せんとする太田飛騨守云けるは
右の為城は舊冬秀詮公仰にて取立然も蔚山は某奉行と成て
普請せしめし城なるを破て捨べしとある事先は秀詮公
を軽んずるなり下には奉行の者を蔑にし給ふ所存某が分別には
叶ひ難し然といへども其事多くの口上に任せて相極べき上は委

及びて夢て打合ひ諸大名一同に飛彈殿主計殿御道をも数人武者程
と頼む所に各々犬の子や角と云ふ事上の御為悪きに似たりと云
しからバ左馬介諸将に向て曰抑今度の蔚山籠城天竺震旦にも未
此例をも聞ず況や我朝に於てをや開闢以来の珍事日本の武勇
を天が下に顕ハす事豈此城に依に非や且ハ一度ならずしかる先手の
城引退のこともハ是程希代の名城を破ると云ふ後世の嘲弄哉
朝の誹謗と存ぜも各の謂に乗じ愚者推参下として上をと計ひ
を浅ふ相似たりと云へども殿下の御心にてハやうその破捨よとの
上意あるハ各と存ずれバ左るべき介に於てハ加判全く致まじ
若各の御所存十分に叶ハし上々殿下の御咎を蒙りなば

事掌をさして是を知る雖然某が存分ハ如此いとて遂ふ加判とさり
る飛弾守右の趣意ふ付て此等の半判ゑく蔚山ハ主付にて籠城ある二十里足
清正も判せざれバ則三十餘人連判し則其趣意細ふ書付言上ふ揃ふる
由秀詮ハ関白殿ふハ後立有て甚る吉事の名城乃入べき言上沙汰の限り
言語ふ断なりといへども諸侍十分余の口上ふ極べき旨仰出さる
されバ是を言上せける處却て上意を背くに相似たり急き言上諸
画し去れバ蔚山城近邊三十餘丁四面の山海泥川の善ふ悪所をゑらみ
く繪図ふ写し城内の案内諸知る弁舌よき士四五人ふ付水主大
勢ふて立返り風波の善悪をも云ずて渡海し早く上言への此道事帰参
する程ふ申付べき由筧和泉守熊谷内蔵允ふ仰付く流石重て右人ふ

宣ひけるは自然萬一の事有て此西城破れしと上意有ば予は蔚山に在城し順天には山口玄蕃允を籠置し此仕合上意に背き流人と成てこれ原に配を肆されども日本へ帰朝は覚悟に不及ばんと宣ふ山口玄蕃允を召て汝順天へ渡海し城廻り絵図面を記し急ぎ帰着すべしと仰に依て御召の小雀丸と云船に乗て昼夜のさかいもなく急ぎ竹島の城に至鍋島信濃守天主に居て物見の士山口が馬験を見より早く兵船数十艘に兵具を入甲兵を乗上使迎として出し其次りやう梁山山の城まで送るりやク山より迎の兵船出て又コチヤウの城へ送りセンの城南海の城次第々々に送て順天へ着し玄蕃允絵図を調へまさ城より送て釜山浦へ乗廻せば則七人の御奉行中へ行付早と言上

有ける使者正月十五日丑の一天に朝鮮を乗出し昼夜共に急程に廿四日伏見の御城へ着府す則五奉行中披露の処に太閤殿下御機嫌斜ならず使者を御前へ召出され籠城の品々具に聞し召上られ大に悦せ給ふ江戸内大臣家康公江戸中納言秀忠卿加賀大納言利家卿會津中納言景勝卿池田三左衛門尉照政（イ輝）佐竹右京太夫義宣伊達越前守政宗島津修理大夫義久等を初として在伏見の大小名悉く登城し其品々聞て偏に公の御武勇蒼天よりも廣大なる故也と各感じ奉る然に爰に五奉行の石田治部少輔三田（イ成）常に逆心の佞兇有に依て有らぬ智略を廻して後関白一品大政大臣秀次公を讒し奉り失ひ奉て又秀頼公をも何と哉と邪心を挾み公の御前に於

て申上けるハ秀詮公は名代にて此度海のむかふには若年なる故か軍事
は出城追討遊ハしは御軍危き次第にはあり若大敵出て釜山海をせ攻とら
るれば城ハ一向本通しの湊を塞れ諸勢難儀に及べしと言上しけ
るハ公も一先實にもと思ハれける所て蔚山順天破て然るべきと乃
連判の上にて上覧ありてハ外急ぎ給ひ抑此蔚山ハ天下無双の
名城なれハ三千餘人連判の者共に蔚山の二字を書て客とりとまじと
て申をも上意あり物ぢ様の繪圖を上覧ありて此差圖仰ける
は蔚山の城本丸よりは方にあたる二三の丸をたち切て本丸の南に
付る脇の石垣高サ十間に築上ゲて外形をなして二の丸三の丸に門を
二ヶ所に入違へて立べし二三本丸の惣曲り臺木をはめなし長屋

を建置し是をもて觸べし城より北に南の大海へ指渡し横五丁余に向の芦原を堀割り新地の舟入として日本舟の北に城へ乗入松に入べし則ち番手を連判の者へ申付若少しにても手おち不甲斐なる者ハ十人にても二十人にても加番に残し置べし番手出来せハ秀詮を先として城主の外ハ皆々帰朝致べき由上意あり其内大忠の面々へハ御感状を下されける

其方働于今不限天正十年五月備中國栄雲山城主松田左近将監を討れ同十八年の六月武蔵國八王寺の城一番乗仕候豊後國臼杵城付三万五千石御知行并拾万石の御代官の地を被仰付其後慶長二年七月高麗唐島表海上に於て團扇を免て諸軍を

きそめ舟軍ニ得勝利若干の大船を焼破翌八月南原の城を一
番乗仕慶州判官弐万騎の大将を討ヱ國中の働き数度證合の合
戦切勝十二月蔚山表の大敗軍殿致諸軍を助同廿四日本丸大
手の門外ニ切出首数九ッ取雖爲小身十六万石の軍中第一勝数
度無類之働寄感不斜依其手柄代官所之内四万石令加増ら
成本知三万五千石都合七万五千石内一万石無役被下六万五千
石軍役之仕ハ猶德善院淺野彈正少弼増田右衛門尉長束大
藏大輔可申也

慶長三年戊戌

正月廿六日　秀吉御朱印

吉田義彈正とのへ

於八道敵出來此方一先之爲也ニ手柄候對面候し
と候間頓て本札のこと可申

其方事先年於江州柴田合戦の刻一番鑓を仕候に付爲御褒美
御知行一萬石ニ而加増被下候其後於朝鮮數度番船を切取比類
手柄之段不可勝計候殊今度順天蔚山兩城之引入番各連判仕
候事不及相判神妙之覺悟也感不斜依其手柄御代官不相應
三万七千百石爲加増遣之本知六萬二千石都合拾萬石内壱萬石
無役九萬石軍役可仕候若國持之聴病者有之者其闕所可爲猶
又國主可仰付候ニ付而弥命を全く仕候之段忠節に見然

柔調儀聊尓働不仕無裁度抛て令覚悟候猶徳善院浅野弾正少弼増田右衛門尉長束大蔵大輔可申也

慶長三年戊戌

正月廿六日　秀吉御朱印

加藤左馬介

とのへ

と成下されける寛和泉守島津又七郎にも御感状御褒美を下されし使者も黄金呉服拝領し御朱印の箱を請取て則廿六日伏見を乗出してより道の湊にとまらずして汐時を待て水主立代て昼夜共に急ぎければ二月二日酉の刻に壱州風本の湊に乗入船人を呼出し

終ふ眼をも合ゝ昼夜梶束をも擬て油断せざれば東方の横雲靉き高
麗國の高山もほのかに見へ渡る上下力を得て猶も万里を隔る
敵國なりといへども故郷に着たる地して程なく四日午刻西生浦に乗入
ける飛弾守が本陣へ御奉行集り封を開き律見を秀吉公御覧
の為寛和泉守釜山浦へ持参せし角で御奉行中浦人を召集め
召出し褒美として白銀三十五枚主計頭左京大夫より十枚ヅゝ
まで浦人忍悦の眉をぞ開らる
秀吉公朝鮮九ッの付城に城主を仰付られ東の先手慶尚道
蔚山の城加藤主計頭同國西生浦の城毛利壹岐守同國釜山浦
城寺澤志摩守同國竹島の城鍋島信濃守同國梁リヤク山の城小

寺甲斐守後黒田筑前守長政同國コチヤウの城立花左近大夫後飛騨守侍従宗茂忠清道泗川乃城島津兵庫頭同國南海の城宗對馬守西の先ハ同國順天の城小西攝津守と定らる其外式ハ餘人の大小名六万二千余人の人數を以て上意の如く蔚山城に付まし普請急ぐべき由杉原下野守山口玄蕃允を以て仰付られけれバ二月六日より掛秀詮公加藤左馬介を召て其方此度加判せざる事比類なき思召依て七人の奉行同じく蔚山普請の奉行を仰付左馬介感涙を流し手前役を赦免ある御事なりと仰付らるゝ事誠に有難き次第とて御請申上御前を退出三月十三日に悉く普請出来せしの趣申并に加藤左馬介此趣大将軍へ言上しければ御祝着に思召されけるバ十七日に清正の朝鮮の地出船で歸朝

仰出さるゝ故に諸大名ハ御供の用意し旗指物をいて舟を飾り在るゆへ
敵ニ向ふがごとく弓鎗長刀を押立十六日ニハ残らず御城下釜山海表の
海上ニ乗浮べける十七日の未明秀詮公ハ日本丸の大船ニ切龍ニ火を立
て推出さる諸将悉く押はさミ奉り出船ありて四月四日秀詮公大坂ニ御
着船有御屋形ニ入せ給ふ諸大将も残らず御供して着岸也御使番の
士を召て早く伏見へ上り町中にて家中の士の宿札を打べし明五日ニハ必
御上洛とぞ仰付五日早天大坂を出御御先手ハ京の下野守一備ニ
玄蕃允ハ旗弓鉄炮鎗こと武の如くなりて御先手ハ御本陣甚間一百余を
隔てハ旗先足軽三百ハ旗奉行中瀬帯刀御本陣の御先手坂崎出
雲守ハ鷹匠の面々も指加りて旗本ニハ使番ニ近習の士供奉して御跡

備の大将松野主馬首行儀正しく諸道具を揃へ静々と伏見へ入せ給ふ都鄙遠境の旅人等に至るまで幾千万の限りなく居並びて見物せし其の行粧を初て帰朝の大小名皆々供奉しけるに大将軍公御登城に依て内大臣家康公福島左衛門大夫正則卿加賀大納言利家卿同嫡子肥前守青木紀伊守京極少将伊達侍従會津中納言山形出羽守長岡越中守 後細川三斎入道忠興 結城中納言秀康卿を始として其外近習外様の大小名残らず伺公の所に大相國公出御大将軍へ御対顔の詞を掛られ七人の奉行左馬介苦労仕りけるを上意あり太田飛騨守蔚山の城上意を以て取直しけるに絵図持参し上覧に入奉りければ三國無双の城なるらんと御機嫌不浅して

従ありけるハ軍ニ勝て功を後世ニ示んハ古今の通例ぞかし況是ハ
秀吉治世の間ニ朝鮮の征伐せる希代の事なれハ和漢両朝末代
の名誉ニ可備と仰て日本の軍勢十六万騎が討とる朝鮮人の首
数十八万五千七百三十八大明人の首数二万九千十四都て二十一万四千
七百五十二平安城の東なる大仏殿辺ニ土中ニ築籠石塔を立て貴
賤今ニ是を見る軍中の為體忠功の者の働など委細日記ニ書付て
諸寺諸社ニ奉納し給ふべきなんど沙汰し敢てんけりハ公浅扶なる
る銭幸と太田飛騨守謹て言上仕る今度秀詮公無類なる陛下
知の恵彰ニより龍兵の運命も助り諸軍勢大ニ利を得事ハ若
年とハ申されけれハ古今無双の尊将危悲ハ公の仁聖勇ニ少しも違

せらるべからずと申上る殿下上聞ありて家康石田三成が讒言し奉
りし故上意有けるハ大将軍の自弓矢を取と云事なし此度秀
詮を名代として遣し深淵に臨ミ薄氷を履とやらん誠に後悔に思召
なりと有ければ上意の下より秀詮公宣ひけるハ飛驒守左馬介能
風を除の常の御名代と有ハ御存知の所存なり有べしとも軍陣
の時の名代なる故若輩なりといへども御請申渡海しける或は今は
後悔の上意出仕の者共数人の耳目に恥しく生界のなるまじく平に
覚ありに於てハ奉行の者共悉に言上致し秀詮が首を刎られ後
悔の痛ならねば猶に飛驒守なる介申上よと繰返し御声高く万
死の御気色と見へて御前に揮なく頻に宣しかバ公御座を立さ

たまひ時御家老の杉原下野守山口玄蕃允に苦労仕りたるとて酒
を掛られ簾中へ入らせ給ひけるに家康公秀詮の御傍近く寄
給ひ御涼しき御わざ此たびの戦は尤も極まりし御父子様の御
子細なべきと様々諫給へバ殿中伺公の諸大名一同に誉奉りし
中に石田治部少輔下野守玄蕃允に近付て云けるハ只今荒き御返
答に依て公御機嫌あしく見へさせ給ふ先御屋形へ御供申べきと私
語ける秀詮公風に聞召て只一討にせんと思召御腰物をおつとり
立せ給ふ所に家康公ひそかにとめられ治部少輔推参を申と罷立
退しと急ぎ給へる御家康公秀詮公の御手を引れ御出城御屋形
に至て御供なる御様和ケ給ふ所に大相國公上使としてカウヅウスと

云承申まり上意の趣申けきられし此度高麗の御働き悴く苦労しく思
召し只今の御詞強く候上は御科怠として越前國一ヶ國替と仰
出されけ由申上られ候ま秀詮公大きに御腹立有て彼丘尼の姻付る
事ありしと散々に悪しみカウヴウス迷惑し上使の身なれば得ば上意
の趣を申上るまでにて私の手の緒ひなるべきと有りければ秀詮公御科
怠請つきたる咎もと覚へず只頭を刎らるべし命有ん限は國替は仕まじ
き由申上よと被仰は家康公カウヴウスを引退給て秀詮公に悦
不思召御前に参る處に仰下されまでと宣ふにカウヴウス参て御丸にお
そ之能く御異見然み進せ御取持の次第政所の御墓様く委く
申上しかば帰まり角て内府色々と御異見一先く筑前へ御國と

宣へ共秀詮公あへて承引し給ハず内府余りに御咎をたゞし給ひければ秀詮公ハさかしき名将なれバ治部少輔が讒言と急度思召合せ給ふに御返答に我命の限ハ朝鮮へ入国思ひもよらず候といへども余りに二心なく異見し給ふ間さあらば路中殿中に浪らば治部少輔めを見合次第討切其後分別せしむべき旨にて放され有無に御同心なければ家康公杉原下野守山口玄蕃允へ密々に御内談有て御家の士少々朝鮮へ指下し宿屋に置給ふべし先ハ大君御腹いせの為也と宣ひ秀詮公ハ隠密し外様の士少々朝鮮へ下し給ふ然るに家康公前田大納言利家に誘引有けれども利家ハきかず依て内府只主一人日々夜々に御登城し給ふ大相国に仕る事

家康此程ハ殊の外ふ奉公ぬり参りくりと宣へ其ハ言葉を種として
家康言上ふ曰秀詮公朝鮮ふての御働ハ淫ら成思召故ふハ國構と仰
出されハ御頓くハ御本國へ御帰國の御讒言申上候奉存ハ得共御機
嫌を恐て申上得きと宣ひ上ぐる其より弥打ちき御登城有
けれハ公ハ御快ふ御ふ又ちみあり候るを仰出家康公何と成秀詮
公御事を讒言申上候ぬるども御機嫌ぬ何ヽ申上得ぬと計
ひふるもの宣ひしかバ公ハ喜悦の體ふて其方ほ程ふ思ひ給ふ家康
次第と仰出さるヽ家康公御前ふて感涙を袖ふ濡しハ御悦有て
定ふ難有上意を蒙りけるとて殿中を立早く秀詮公ハ屋形へ
入給ひ両人の御家老ふ向て越前へ遣しある御家人早速呼上せ御本

國筑前へ下し給へと宣ひ扨秀詮公御供にて六月二日に登城ありしに公御對面に機嫌能して秀詮公へ朝鮮苦勞の御褒美と仰せて夕カキ貞宗の御太刀吉光の御打刀大般若捨子の御壷二ツ御茶道具に鷹弐足に馬二疋黄金千枚進せらるゝ家康公へ光忠の御腰物判金三百枚下置れ御振舞杯との御馳走にて両将を御もてなし給ふに秀詮公御使番長崎伊豆守を召て家康公へさゝる御詞に今日今度御扣持をとれ本國へ御返其上色々に懇ふに時令をも御禮申し上とぞ仰られける七月上旬の比より大相國公何となく御違例と風聞ありて同度にて代の威風廣大無邊にして四海波静に納り揚柳の風枝を鳴さで梨花乃雨堺を破らずとやらん春は吉野醍醐の御花見夏は四月の殿中に

一 大きにきこゆる夢の事　一 あさ稀なる夢の事

一 人に馳あつまる夢の事　一 身のゆく為清き夢もきこゆ

一 川におちくきこゆ　一 敵におちくきこゆ

一 肉のくされあまくきこゆ　一 河にも人あまる夢の事

一 抱たいうまる夢の事　一 何かにも清き抱をひぢもきこゆ

一 何か〳〵

露の世は清夢ときこえけり我身これ

たゞなにごともゆめの又ゆめ

とぞ遊びける去ば脳目と邪気をたのもしげなく見させ給ふ天下の名医数を尽て集り岐伯黄帝の秘書を学し河間丹渓の妙方

をときざみつしかきとても更に験もましまさゞれ社〳〵の奉幣寺〳〵の鎮
祈月待日待星祭泰山府君まで祭りけれども法定業なれバ甲斐もな
し淀松の御臺所へ申に及ず殿中上下の女房達弥力を失ひ荒や
あん角や滑つせ張かんと案じ煩ふ折節中の丸の御主殿本村宗
森が立さりし跡柱敷居鴨居等折入の天上までも金のうる具の高
蒔繪なく襖障子なりしに高八狩野長谷川が筆を尽して書し唐子
の人形二万も三万も数を知ず有しに忍び尽見えしが八血の滴り
王不思議とおもひ委しく見れば幾千万も悉く眼の際より額先
まで落もなく濃もなき血の涙一同に付て有けれバ諸人是を見て
氣も魂も失果て泣あかれ伏ひ涙にむせぶ斗なり十七日の辰の刻

公大野修理大夫早見甲斐守片桐東市正を御座の御主殿へ召され
御盃を下され秀頼をもり立べき由上意あり又ハ東山の麓に
構へ正一位豊國大明神と崇し奉るべき旨仰らるゝに三人承て
悲涙を袖に濡し御前を罷立ぬる然るに此君天文五年丙申八
月十八日辰の刻に誕生ありしに慶長三年戊戌葉落月十八日辰の刻
御年六十三歳にて御薨の夢ぞ醒玉ふ大名高家の恩澤に浴せし
ものハ云ふに及ばず天下の貴賤男女ゑや女まても考妣を喪するが
猶悲り皇唐堯殂落し玉ひ四海八音を止とかや其ハ上古の聖
帝是ハ末世の名将時隔り世異りといへども符節を合せるが
如くの有難かりし名将なり今ハの際の御辞相謀に人に勝を玉へ

りれ蕙蘭ハ悴易く良玉ハ堅からし人浮世ハ只夢の如し悦るもらく
ハくぞやと只今更思ひ知られ侍りけり御事なりし石田治部少輔三成
浅野弾正少弼長政増田右衛門尉長盛長束大蔵大輔正家片桐
東市正同主膳正大野修理大夫相談し御他界を暫く隠密し
ましませど沙しくて御死骸ハ金具蒔絵の御箱に納め奉りたる然を
いへども御他界世に隠るなきに依て此長月の上旬都の東に当る
阿弥陀が峰に御箱を納めまいらせける
秀元金吾黄門秀詮公りの使に奉りし此政所様へ御使として
参りし砌ゆるくと御返事を待る間にカウヅロス此出合四方
山の物語の序に秀元なる八大名高家の身の上にさへ人に

よく語しきたりもけると聞るまして大君御在世の御時
奇異なる事なりとはいかるやと尋ねまバカウヅウス答て申して除り
ふかきりなる詔辞ハ及ざるが折〻昼の比まどろみまで給ふを
て御目覚給ひて記し奉る人〻又人〻も来る処と偽
て只一人御座敷へ入せ内よりかぎをかけさせかひて乃ところ
ま務に不除ましく久しく御目覚ざる折柄ハ基計を持て行
て障子に少き穴をあけて潜に見まれバ十五式八二三尋
御座敷一はいに大きなる蛇ら在に御姿幾度も河の丈蛇の地
姿の時もは在る大なる成らを語ひし貌と見られる時も身
乃毛もよだつ計なりし見角当の御人体まで八無りなりとぞ

子孔雀鳳凰或ハ大小の禽獸大魚虫けらにいたるまで種々の作物道すがら御寳前にて躍る拍子ニ吉野桜の散るか如し十二頭の驗ニハ白綾白羽二重とんて十二幅の折掛十六幅の白母衣十二幅の吹貫或ハ金襴緋純子ニて大籏を立一手〳〵ニ押立鐘太鼓笛鼓洛中をひかしたる大明神の宮中御門外ハ云ふに及バず洛中ハ皆金銀の砂を敷たりき異國の事ハいざしらず日本ニ於て開闢より以来例をきかざりけり

右此書を見る人ハ始終只大河内氏の軍功を挙るに似て贔屓しのまゝに其ハ誉るとあくよしあし言を書付侍りなどと云ん然りと云共其ハ隠居てゐるを探るに凡士たるものの自媒して婦女

あ行をあてすゆへんや禹をとかめ孟殿を称する事を帝べし上ニ八
殿下の威武を顯し将卒の忠義を筆下に後裔を勵さ
さんと欲するなりん然も此書の中に大道妙用あり謀あり
奇計あり豈士たるもの、明鏡後戒にあらざる事を得んや
文辭に三史春秋奇筆あり和歌に源氏二代の佳作ありて
の徳實を拾ひ浮かんで文辭の盛なるを見べし謀策を
摘ば何ぞ言句の奇なくさる事を謗らん後覧の君子其
辞句の賤しきを咎めず志氣らしさのまゝに其塲くの日記に随
て是を校し是を正し縦ひ敵の末の葉なりとも何んぞ有
る無とし無るを有とせんや此上に於て日本國中大小の神祇

殊に八氏神八幡三所に誓て一言の詐偽なき旨代頭に添ゑその也

清和天皇—貞純親王—六孫親王

鎮守府将軍満仲—鎮守府将軍頼光

讃岐守 右馬頭頼國—左衛門尉 参河守頼綱—兵庫頭仲正

大祖従三位 兵庫頭頼政—伊豆守仲綱—右衛門尉有綱

大河内元祖 伊豫守秀綱—大監物仲詮—左近将監政忠

越前守義政—右京大夫政茂—判官 出雲守頼定

左衛門督井政—左馬頭政國—悪兵衛監
左近将監季政

出雲守政詮—兵庫頭政親—伊賀守孝盛

左衛門尉政長—善左衛門尉
出雲守基孝—善一郎
善兵衛尉政綱

大河内友大膳大夫入道成也齋

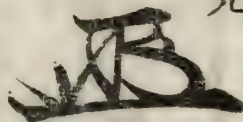
寛文二年壬寅八月吉日

従五位下諸大夫
源　秀元

右相傳之所

同造酒允秀連

右此一巻者備前高麗國へ渡海せし時の日記を集て以て朝鮮物語

と号く自筆の判形を以て予に相傳の処なり然に八幡山下傳誉上人にあり是を望まるゝ父の菩提所なりしかバ幸と是を納奉る者也

大河内造酒允

秀連（花押）

寛文十二壬子天正月吉日

正福寺傳誉上人願阿知郭大和尚

語巻之下 大尾

新發行書目

書名	冊數	定價
西洋 百工新書	全五冊	
前篇	一冊	定價金貳拾五錢
後篇	一冊	同 金貳拾五錢
外篇	三冊	同 金八拾錢
百工 器械新書	全二冊	定價金五拾錢
百工 製作新書	全三冊	定價金壱円
百科 工業新書	全二冊	定價金六拾錢
佐藤信淵 經濟要錄	全七冊	定價金貳円
艸木 六部耕種法	全拾六冊	
同 前篇	八冊	定價金壱円七拾五錢
後篇	八冊	同 金壱円五拾錢
新訂 日本輿地全圖	全壱枚	定價金壱円三拾錢
支那全圖	全壱枚	定價金五拾錢
日本外史年表	全二冊	定價金六拾錢
近世 日本外史	全六冊	定價金壱円五拾錢
同續	全二冊	定價金五拾五錢
國史評林	全八冊	定價金貳円
啓蒙 正文章軌範	全六冊	定價金壱円貳拾五錢
明治 百家文鈔	全二冊	定價金六拾五錢
同續	全二冊	定價金五拾錢
近世詩史	全二冊	定價金三拾錢
明治詩史	全二冊	定價金三拾錢

造化妙々奇談　全壹冊　定價金六拾錢

同　貳篇　一名造化博覽會　定價金六拾錢

御伽玉手箱　全壹冊　定價金貳拾錢

養生新編　全四冊　定價金六拾錢

小學塡字法　全壹冊　定價金拾六錢

小學生理書　全三冊附圖　定價金七拾錢

士氏物理小學　全三冊　定價金七拾錢

通俗演義三國志　全四拾壹冊

初篇　九冊　定價金壹円五拾錢
貳篇　八冊　同　金壹円貳拾五錢
三篇　八冊　同　金壹円貳拾五錢
四篇　八冊　同　金壹円貳拾五錢
五篇　八冊　同　金壹円貳拾五錢

婦女性理一代鑑　全三冊

壹篇　一冊　定價金六拾錢
二篇　一冊　同　金壹円
三篇　一冊　同　金壹円

同三編合本　全一冊　定價金貳円五拾錢

右書定價御送り被下候ハヽ國内何地ニテモ遞送賃當方ニテ辨御送り申候間御用向奉願候也

東京芝口壹町目
書林　牧野善兵衛

嘉永二年己酉五月刻成

東都書林　和泉屋善兵衛